

彼らは
信頼しあつて
いるの
だろうか？

エッセイ I

エッセイ II

エッセイ III

短編小説

エッセイ IV

書物

FROM 2010 TO 2025 with POPS

わたしたちが人に何かを「権利」がないと思つてゐる

信用^が信頼^を呪^く

はちもつなす^ひ

FROM 2010

TO 2025

With POPS

昨年の紅白歌合戦で、ミセス・グリーンアップルという人たちを初めて見

た。「人たち」という言葉をしているのは、彼らのことを「バンド」と呼んで

いいのかどうか、わたしの知識と感覚ではわからないからだ。

いまの若い人たちが、こういうのが好きで、こういうのが胸に響くのか、

ということを、不思議に思いながら眺めていた。

わたしはふざけているわけではないし、何かを馬鹿にしているわけでもな

い。そもそも、わたしの年齢と世代から考えて、わたしがいまさら現代のポップスに入れ込み、ミセス・グリーンアップルに「感動した」なんて言い出すはずがないだろう。

そもそも、わたしの言葉が悪い。

ミセス・グリーンアップルの人たちのほうも、わたしなんかが肩入れして

聞きたくなるというようなことは、感覚的にノーサンキューのはずだ。

わたしが考へるのはただ、現代の中高生が、どういうマインドでこうした

ポップスに肩入れしているのだろうか、ということだけだ。

あるいは二十代の人も、ミセス・グリーンアップルに対する肩入れはある

のかもしれない。わからない。

三十代の人はどうなのだろうか。

そんなことを考へるが、考へるだけで、たいして調査やヒアリングができるわけでもないので、けつてよく何もわからぬまま、「どうなんだろうな」と思つてゐる。

わたしのような世代からは、彼らがまるで、互いに信頼関係を持つていな

いように見える。

世代のせいなのか、それともわたしの個人的な思想のせいなのか、わからぬが、とにかく彼らはまるで相互に信頼関係を持つてないよう見えて、それでわたしは彼らがいわゆる「バンド」に見えなかつた。

それは単に、わたしのレンズが古くて歪んでおり、実像を曲げて捉えてい

るだけで、本当は相互にばつちり信頼関係があるのかもしれない。

いちおう、ミセス・グリーンアップルと、カタカナで表記することに違和感があることは了解している。これはわたしの世代のせいではなくて、ただわたしはエディタで筆記するのに縦書きで記述しているから、というだけだ。

Mrs. GREEN APPLEと聞いて、安易なわたしは、映像を観るまでは女性がリードするバンドなのだと思つていた。

Mr. ビーンと聞いたら、例のおっさんを思い出すじゃないか。それと同じようにミセスを連想していた。

むかし、日本にはあまりポップスというものがなかつた。

ド昭和のころ、日本では、高齢者は演歌を唄い、若年者は歌謡曲を唄つて

いた。

歌謡曲は何かがポップスとは違つた。もちろんピンク・レディーはポップスじゃないかというような例外もあるだろうけれど、そこまで細かいことは、

さすがにわたしも直撃の世代ではないのでよくわからない。

ド昭和のころ、「冬のリヴィエラ」とか「ルビーの指環」とか、「飾りじゃ

ないのよ涙は」とか、そういうものが歌謡曲だったと思う。

ポップスらしいポップスの出現は、きっと「チエツカーズ」ぐらいからではなかろうか。

若い読者にはまったく通じない話題だと思うが、そこはそれ、逆に若い人に向けてこそ、こうしたじょうもないことはいちおう語られていくべきだと思つのだ。

かつてどのようなものがあつたのかということ、そしてどのように現在につながっているのかということは、古い世代から語り継がれるべきだと思う。いちいち把握なんかしなくていいのだ、聞きかじりが頭のすみっこに残つていればいい。

それがずっと後になつて、知識を体系化することに役立つてくることがあるから。

(なんだアこのジジイみたいな話しぶりは)

歌謡曲の歴史は、美空ひばりとか、笠置シヅ子とか、植木等、三橋美智也ぐらいまでさかのぼれば十分だと思う。

エノケンまでさかのぼる必要はないだろう、そのあたりはもう戦前の匂いがする。

ともかく、歌謡曲の以後、チャッカーズあたりでポップスが流行し、その次の世代に横原敬之やリンクバーグが出てきた。「愛は勝つ」とか「それが大事」とか、いわゆる一発屋も出てきた。

その裏側ではロック音楽が活性化していった。50年代にアメリカの黒人から発生したロックンロールは、白人のプレスリーに受け継がれ、プレスリーからイギリスのビートルズに輸出され、ビートルズが日本に輸入した。

輸入されたロック音楽に影響づけられ、ザザンとか、矢沢永吉とか、ブルーハーツとか、尾崎豊とかがミュージックシーンを形成していった。スピッツも入れておいてやろうか。

時系列がだいぶデタラメだが、それでもだいたい合つているだろう。

ロック音楽以外にも、洋楽の流入はどうぜんあって、遠くから聞こえてきた洋楽は、ディスコ音楽や映画音楽を匂わせながら、J・POPと融合していった(いつから「J・POP」という言い方がされだしたのかは不明だ)、そのポップス方面での融合では、メディアとしては小室哲哉が先駆けということになるだろう。

ただ当時のわれわれは、あまりにウブだったため、小室哲哉のそれが洋楽の流入だということをまるで知らなかつた。

洋楽の流入と共に、シンセサイザーが発達してゆき、誰もがシンセサイザーの音色を愛好するがあまり、ポップスはいわゆるシティポップというサウ

ンドへ傾倒していった。そしてその裏側では、きっと「テクノ」と呼ばれるジヤンルが夜な夜な発達していった。

そうして、ポップスが成熟してゆき、ロックも浸透してゆき、音源楽器も発達していくと、90年代の中頃は、とにかくB2Bとミスチルとドリカム、というような時代になつた。一言でいえば「パワフルな歌い手」という時代で、当時の若い人たちのマインドを力強く励ます——あるいはけしかける

——ことになつた。

同時期、ザザンももちろん活動していたが、ザザンはあまりブームの筆頭という感じではなく、いつもどこか出自の違う「音楽家」のよう感じだつた。

「いとしのエリー」は、小室哲哉よりずっと前の曲なのに、なぜかあまり「うわあ懐かしいなあ」という感じにならないものな。

いとしのエリーなんかは、きっとスタンダードナンバーになつてしまつたのだろう。そうしたものはたしかに、ブームの筆頭に立つものではないかもしれない。

90年代の末期になると、全体のムードがガラッと変わつていった。「ゆず」が出てきて、肩の力が抜けたような感じになり、「GRAY」「ラルク」が出てきて、ヴィジュアル系という呼称を受け止めかねて、当時の若者たちは戸惑つた。

その後につづく、バンブ・オブ・チキンを、「これもヴィジュアル系なの?」と戸惑つて受け止めかねたのを覚えている。

パワフルに励まされる、けしかけられると、いうことが、どこからともなく終焉したのかもしれない、そういう時代だった。それが90年代末のこと。

その後のことは正直よくわからない。

00年代初頭、きっとaikoとか矢井田瞳とか、大塚愛とか倖田來未とか、女性ヴァーカルがポップスシーンを席巻していったようだ。

(同時に、アブリルラヴィーンの「Sk8erBoi」がヒットしたことが、女性

ヴァーカルの潮流を後押ししていったようだ。

同じころ、男性のサウンドは、ヴィジュアル系から汗臭いバンドロックへ引き返そうとするかのように、ロードオブメジャーとかMONGOL800

とか、マキシマムザホルモンとかに切り替わっていったはず。

わたし自身は、00年代の初頭には、すでに社会人になつておらず、単純にいつてクソ忙しかったので、このあたりの潮流においてはもう「当事者」ではない。

そして、00年代の後半になつて、さらに大きな変化がおとずれる。

言わずもがな、ヴォーカロイドの登場、ならびに「歌つてみた」というジャンルの発生だ。要するに「メルト」だ。あるいは「炉心融解」とか「初音ミクの消失」とか。

このことはもちろん、インターネット接続のブロードバンド化、ならびに「常時接続」というテクノロジー背景に支えられて起こつている。
(若い世代に向けて言うと、それ以前はインターネットといふのは常時接続ではなかつたのだ。用事のたびに、いちいち電話回線に電話をかけて接続していた。そのたびに料金を取られた。いまではちょっとと考えられないよなあ)
「メルト」、この時代に青春を迎えた人は、大真面目にサビの手前で「鳥肌注意」をやつていたのかもしれない。

このあたり、わたし自身は、いちおう知つてゐるつもりでいるが、やはり当事者ではないので、どこまでも知つたかぶりにすぎない。

「炉心融解」を聞いたとき、どう考へてもこれはドラマムンベースじやないかと思ったが、やはり若い人たちはウブなのできつとそんなことはまったく知らなかつたのだろう。いつぞやのわたしと同じで、そういう単純なことにおいて歴史は繰り返すものだと思う。

90年代の小室哲哉の背後には、ジャングルというジャンルがあり、そのジャングルからドラマムンベースというものが発展していったそうなのだ。

そんなの知るわけねえよつて思うよな。

十代の少年少女というのは、何でも真に受け、何にでもだまされる存在だと思う。

それでいいのだ。けつきよく、そうして真に受けたものの中にこそ真実があるから。

それで、00年代の後半はボカラおよび「歌つてみた」の時代だつたと思うが、そこから日本では10年代のはじめに東日本大震災が起こつてしまい、

そこで何もかもが消沈してしまつた。

震災を結節点に、もう「ニコニコ動画」「ボカラ」「歌つてみた」に(本格的に)肩入れしているという人はいなくなつていつたに違ひない。

その後、米津玄師という、ニコニコ動画出身の人が紅白歌合戦に出て、国

民にいよいよ「時代は変わりましたよ」という通告を済ませることになつた。国

高齢者も観てゐる紅白歌合戦に、ニコニコ動画出身の「歌い手」を設置したのだから。

このあたりできつと、ニコニコ動画「界隈」のはたらきは、ひとつのがるを迎えたのだと思う。

いま調べてみたが、米津玄師さんが紅白に初出場したのは二〇一八年の二〇二四年に至るともう、若い人は「ボカラP」「歌つてみた」界隈の経験者ばかりだもんね。

ボカラと「歌つてみた」のブームは、およそ十年間隆盛し、最終的に紅白歌合戦に「歌い手」を送り込んだ、ということになると思うけれど……

えらく話がざつくりしてきたな。

このあたり、けつきよくのところ、わたしは二〇一一年の震災以来、若年層におけるミュージックシーンの変遷を、まったく手触りを持つては捉えられていらないのだ。

いつぞやジャンヌダルクというバンドが流行してゐると聞いて、「へえ、いちどは聴いてみようかな」と思いながら、けつきよく手つかずのまま、いつのまにか「それはもう古いですよ」と笑われるようになつた。次いで、RADWIMPSが流行してゐると聞いて、関心を向けようとしていたが、けつきよく「君の前前世から僕は」しか知らない今まで終わつた。

ゴールデンボンバーについて、わたしは「えつ、これつてネタでやつているのじやないの? 違うの」と理解できずに動搖するばかりだつたし、「ヒゲダン」と聞いてもわたしはいつぞやのお笑い芸人の「髭男爵」のことかと思つたのだ。

つまり、わたしはここ十数年間について、「何が起こつてきたのかまつたく知らない」まま、唐突に紅白でだけミセス・グリーンアップルを見、「よく

わからない」と思つて、年を越したのだった。

そりや、よくわからなくて当たり前だ。

10年代から現在二〇二五年に至るまでの、十五年間の変遷が、わたしの知識から完全に抜け落ちている。

このことを補完するのは、きっとわたしではなくて、世代の違う、若い誰かなのだと思う。

わたしは年長者として、ここまで何があつたのかを話したので、次は若い誰かが、ここまで何があつたのかを話してほしい。

どれだけ検索しても、わたしにはわからないのだ。

いつこうなつたのか、なぜこうなつていつたのか、十五年分の知識が欠損している。

いつのまに、YOASOBI が自殺をささやきかけ、ヨルシカが自殺をささやきかけ、ツユが自殺をささやきかけ、「ギリギリダンス」が自殺をささやきかける、ということになつたのか。

そして、なぜすべてにアニメ絵が貼り付けられていて、なぜ、すべては引きつつてまるで「ごめんなさい」と言つてゐるようなのか。

ド昭和に植木等が唄つたことと、あまりに変わりすぎじゃないか。

「♪おれはこの世で一番、無責任と言われた男」 ガキのころから調子よく楽して儲けるスタイル

さすがにド昭和と現代は離れすぎていて比較できないにしても。

この十五年間に何があつたのだろう。

現代は、まるで「大ごめんなさい時代」のようになつてゐる。

現代の若い人の内心、あるいは集合的無意識は、いま「大ごめんなさい」なのだろうか。

何にごめんなさいのかはよくわからない。

しかも、大ごめんなさい時代といつても、その背後にはすぐブチギレヒステリー攻撃が控えているのである。

わたしは、現代の若いアーティスト（ミュージシャン？）は、この時代のところをよく捉えているのだと思う。

だからこそ、彼らはこの時代に「すべて」はおらず、ちゃんと「ウケて」

いるのだ。

昨年の紅白歌合戦では、初出場の B'z が、サプライズ演出で登場し、ステージを極端に盛り上げたので、あらためて紅白歌合戦とともに、面目躍如をもたらしているそう。

そのことは、すごいことだが、同時にわれわれの世代においては、「そりやあな」という感触もある。

B'z の稻葉さんが、とてもないブチアゲ力を持っているのは、古い世代には既知のことで、さらには既知というよりすでに「信頼」という領域にあると思う。

「そりやあな」

その信頼については、もはやあらためて畏怖させられるという感触さえする。

B'z って、唄つてゐる内容は、今で言えば陰キャの歌なんだけれどね。われわれの世代、どうしてもダサい奴にしかなれなかつた僕たちは、どこまでも励まされたものだ。

ダサいものは、どうしようもなくダサくて、ダサいということは、つらいつたらありやしないのであって……逃れられない事実があつた。トホホとか言えない現実。醜くてみじめな自分を直視するのはつらい。そして、だからこそ、せめて何かを超えてみせようと奮い立つところがあつた。涙ながらにだ。そのことの背後に B'z があつた。

二〇二四年末、いまも示される B'z の健在と普遍性はすばらしいといふか壯絶なものだつたが、一方で、それによつて若い人々を支配している現在の「大ごめんなさい発狂時代」が書き換わるかというと、さすがにそうはないと思う。

やはり引き続き、多くの人が、自殺をささやきかける鬱ソングに、親しみを覚えて聴き入るのだろう（百パーセント全員ではないにせよ、集合的には）。

この十五年間、ポップス音楽に引き当てて、何が起こつてきたのか、その変遷をわたしは知らない。

この残りを補完するのは、わたしではない、若い誰かだろう。

この十五年間に、いつたい何があつたのだろう？

わたしは人に

何かを言う権利が

なぜこんなことになつてしまふかというと、それはさびしさのせいだ。じつさいに直撃されたら、ひたすら「頭がおかしい」としか感じず、たかにそのとおり頭がおかしいのかもしれないけれど、なぜそうして頭がおしくなつたのかというと、さびしさのせいだ。

さびしさは、れつきとして、人の頭をおかしくさせる。

さびしいおじさんやおばさんは、人とのかかわりがなく、誰にも認めてもらえないで、勝手に目にする誰かとかかわりがあるかのような妄想を抱え込むことになる。

わをしは、人こ、何かを言う権利がないと思つてゐる。

たとえば、家の向かいに、中学生の女の子が住んでいて、彼女のあたらしい髪型が似合っていないかったとしても、「おたくの娘さんの、髪型が似合っていないと思います。変えるか、元に戻したほうがよいと思います」

そういうような手紙を向かいの郵便受けに投げ込んだりはしない。
それはさすがに、そんなことする奴はいないだろうと思えるが……
そうでもないのだ。

じつさいに、閉塞的な田舎では、たとえば、

「おたくの息子さんは、まだ中学生だと思いますが、長い髪を茶色く染めており、それがとても見苦しく感じられます。元の黒髪に戻してください。近

というような投書があつてもおかしくはないのだ。

たとえは
井戸端で

おたくの娘さん、まだ結婚されないの？もういい年だと思うのに大丈

みたいなことをずけずけ訊いてくるというか、詰め寄ってくるという人はいるのだ。

それで、テレビのワイドショーと友達になり、週刊誌の記事と座談して、もう若くない日々を過ごしている。

それで、まだこれから何十年か生きなくてはならないのだ。

状況が改善する見込みはなく、この先の数年後に、友人を得てにぎやかに暮らすというようなことはとうていありえない。

それはもう、頭がおかしくなつてとうぜんだ。

それで、老人になると、家にやつてきた悪徳セールスについ引っかかる。笑顔で家に押しかけてくるセールスマンが、自分の友人であるわけはないのだが、そうとわかつてはいても、どうしてもさびしさのほうが勝つのだ。自分は、さびしくない、人とふれあつてはいるんだ、という妄想にすがりつ

わたしはどう答えるべきだろうか？

あなただったらどう答えるだろうか。

わたしは本心でしか答えない。

まったく無意味に強調しておくが、わたしは本当に、本心でしか答えない。

わたしはたぶん第一声、

「ぜんぜんへンじやないよ」

と答えるだろう。

わたしの本心だ。

わたしは本心でしか答えない（しつこい）。

「おおげさな髪型で、不慣れな化粧だ、でも別にへンじやない。かわいいし素敵だ」

この髪型と化粧で、人に会えば、髪型と化粧がへんだと言つて笑う人もいるかもしれないが、そういう奴はたいへんひどいブスだ。ひどいブス女か、頭の悪いゴミ男だ。だから気にしなくていい。

ガキというのは、精神の中身がカビの生えたサツマイモみたいなものだから、しようがないのだ、ミリも気にしなくていい（この一文はあきらかに要らない）。

このおおげさな髪型と、慣れていない化粧は、あなたによく似合つていて、とても素敵だから、どうぞこれからかけがえのない、素敵な一日を遊んでいらっしゃい。

おれは本心からそう思つてそう言うだろう。

何がへんかといえば、彼女のおおげさな髪型と、慣れない化粧のことを、指さして笑う連中のほうがへんだ。

わたしに判断力がないわけではない。

わたしの判断力においては、彼女の場合は、髪型をいじるのは「それなり」のていどでいいだろうし、化粧は「ちょこっと」でいいと判断する。

どていどが彼女に「似合う」のかも、さすがにわかる。当たり前だ。

だが、そのクソつまらない判断と、わたしの「本心」は別だ。

わたしの本心は、彼女の髪型と化粧を、似合つていて、かわいくて、素敵だ、と言つてている。

すばらしく、かけがえのない一日を遊ぶべきだ、と言つてている。

いちおう、ジジイみたいなこととして、

「きょうのあなたは、素敵な髪型と化粧で愛されるだろうけれど、仮にこれらのすべてをやめて、すっぴん顔のボサボサ髪で遊びに行つたとしても、あなたは同じように愛されるだろう。それはそれとして、いつてらっしゃい」

ぐらいのことは言うかもしれない。

われわれが目の前にしているのは、美容のコンテストでもなければ、化粧品の媒体広告でもない。

目の前にしているのは彼女と、彼女の魂と、彼女の青春だ。

彼女が、彼女自身を傷つけて貶めようともしないかぎり、彼女に似合わない髪型や化粧などというものは存在しない。

これについて、一部のアホは、どうしても次のように考えるのだ。

「え、だつて。髪型はへんだし、化粧もへんじやん。へんなものはへんじやん」

お前の脳みそはワセリンで出来つていて、お前の眼球は天然ゴムで出来ているのか。

可燃ゴミに出すぞこの野郎。

本心で話さない奴に信頼を覚えることはできない。

一部のアホは、本心と本音の区別がつかないのだろう。

そして、宇宙のどこにも必要とされていない、ボクの本音をつぶやいてまわるという、近所迷惑な自我インフレーションを起こしているのだ。

罰として、反省しながらアンドロメダまで歩いて帰つてこい。

髪型がへんとか化粧がへんとか、そんなことは誰だつてわかっている。誰だつてそれぐらいのセンスはある。眼球がついていればそれぐらいのセンスは誰にでもあるのだ。

もし、どうしてもそのセンスが気になるとということであれば、わたしはただ彼女をどこかのちゃんとした百貨店に連れてゆき、その化粧品売り場にいる専門家のおねえさんに、それっぽくしてやつてくれと頼むだけだ。

現代だと、そうして中学生の女の子を連れて行つたら、それだけで犯罪になるのだろうけれど、そのときはかまわん、おれが犯人になれば済む話だ。

犯罪者として通報してくれ、そんなこと何の関係もない。

何が犯罪かといつて、女の子の髪型や化粧に勝手な口出しをしているほうがよっぽど犯罪だ。

わたしは、人に、何かを言う権利がないと思っている。

だから、わたしは、人に何かを言わない。

わたしは本心で「話す」だけだ。

本音で何かを言う、というような、閉塞したさびしさの権化みたいなことは決してしない。

これを読んでいる若い人は、本音と本心の区別をつける。

そして、本音が漏れているだけの人、本心で話すということができない人のことを見、あなた自身が本當には信頼していないということを発見しろ。

本音と本心はまったく別のものだ。

大切なことだから少し例を挙げよう。

たとえば、わたしは本心から話すが、人は、どうしようもなく忙しいとい

う人以外、できたら、ひととおりの料理を覚えるべきだ。

料理の、やり方やレシピを覚えるのではなく、「料理」というそのものを覚えるべきだ。

もちろん、他のことで忙しそうな人は、さしあたりあきらめてしまつてかまわない。

「料理」というそれじたいの當為を覚えるべきだ。それは知識ではないしノウハウでもない、しかもテクニックで覚えない。

「料理」というものがあるのだ。

家庭科で習えるものではないし、料理クラブで習えるものでもない。

なぜ料理を覚えるべきなのか。

それは、必須だからということではなく、身近でおトクだからだ。

自分で食べる食事を、料理できるということ。

このことは、とても原始的で、それだけに直接、自分が生きるということの自信につながつてくる。

楽しく料理できて、おいしく料理できると、かなりのていど、楽しく生きられるという自信がついてくるのだ。

それがなぜなのか、はつきりした理由はない。

もつと原始的なものだ。そのことは、料理ができるようになつたらわかる。

料理ができるようになるというのは、すり流しや骨蒸しや利休寄せが作れる、ということではない。

バターロールに切れ目を入れて、香薰ソーセージとレタスとマヨネーズをぶつこみ、これで「うまい」と確信できるということだ。

料理ができない人は、その「ぶつこむ」ということを、確信をもつてやれ

る、ということではない。

そうした、料理の本質は、あなたが信頼する誰かに教えてもらうべきだ。やり方を教えてもらいつつ、同時に、何かを伝授されるのだ。

この人が、パンにソーセージをぶつこんだら「うまい」、そう信頼できる人から、そのぶつこみ方を伝授してもらうのだ。

(本に載っている人でも、動画に出てている人でもかまわない、私淑でかまわない、成否は信頼という点だけにかかっている)

わけのわからないことだが、料理というものはそうして獲得される。

稽古とか、師匠と弟子とかは、そういった形式でしか得られないのだ。

料理を伝授され、獲得したとき、我が手で「バターロールに香薰とレタスとマヨネーズをぶつこんだらうまい」というのが確信される。

そうなつたとき、自分が一定の幸福を得るために、大間のマグロは必要な、ということがありありとわかる。

バターロールに切れ目を入れて、そこに生きる全力をぶつこむのだ。

信頼に至つた者の手にはその力がある。

生きる全力をぶつこんだバターロールからは、生きる力の味が返つてくる。

うまい。

生きる力がみなぎつてきて、生きるということの自信になる。

こんなことが毎日の基本になる。

いつだつてそれがやれるのだという自信になる。

だから、できたら、毎日がクソ忙しくてどうしようもないという人以外は、料理というのは、ひととおり身につけたほうがよいのだ。

もちろん、信頼できる師匠に出会うまでは閉塞するしかないのだけれど。

それについても、もう一度と、

「料理？ えーっと、本を見ながらならできます」

というウソをつくな。

「料理は、未だ師匠を得ておりませんで、到底まともにはできません」

と言え。

というわけで、わたしは本心から、めずらしく料理なんてことについて話した。

これについてあなたは、わたしから何かを「言われた」と感じるだろうか。

そんなことはない、あなたはただわたしの話をいつのまにか聞いただけだ。

わたしは、人に、何かを言う権利がないと思っている。

「その髪色は軽薄だつて。元の黒髪に戻したほうが絶対いいよ。あとその化粧もさ、慣れていないんだと思うけれど、ごめんね、けばけばしくて正直へンだよ。それと、女性だからってわけじゃなくて、料理はぜつたい勉強したほうがいい！ 自分で自分の食事を作るのって、原始的なことで、自分が生きる自信になるから。しかもさ、料理って毎日やることだから、出来るようになると、身近でお得なんだよ？ これ、いちおう本気で言つてはいるし、ぼくの本音なんだ。ぼくが本音で言つていて、ウソを言つていないつてこと、わかつてくれるよね」

こんなものは会話でも何でもない。コミュニケーションがブッ壊れている。さびしい人が、慰めに自我インフレーションに駆られ、そのまま数十年を生きてきたのだろう。

自我インフレーション者は、自他の障壁が壊れているので、「本音」であなたの自我に侵略を仕掛けてくる。

つまり、

「髪色を黒に戻し、ナチュラルメイクにして、料理の勉強をしよう」

と言つてくる。

本音、あるいは「ホンネ！」とカタカナで書いたほうが印象的だらうか。

わたしは、人に、何かを言う権利がないと思っている。

わたしは、人に、ホンネで侵略する権利はないと思っており、そんなことより、本心から話すという態度と能力を持つべきだ、と思っている。

向かいの家の、中学生の女の子は、おおげさな髪型と慣れない化粧で、かけがえなくかわいく、素敵だ。

彼女がバターロールに全力ソーセージをぶつこんでくれたら、その料理はきっとうまいだろう。

わたしの言つてることは、きっとそれなりにまともなことで、聞いてりや誰だつてそのようであるべきだと思う。

だがにわかにそうはいかない。

「信頼」がないからだ。

表面上をなぞつても、「信頼」は生まれない。

「信頼」ということの手ごわさ、そしてどうしようもなさに、あなたのこころの内部で、何か暗転のようなことが起ころ。

その暗転は何なのか。

その暗転が「さびしさ」だ。信頼の輝かしさが暗転するとさびしさが浮き出る。

さびしさと信頼が対極の関係にあるということがよくわかる。

信用が 信頼を

叩く

「イメージも何も、ヤバいっしょ、マジ無理っしょ」
じっさい、マレーシア航空は、マレーシア航空じたいのやらかしもありながら、それにしても「不幸」が続き、利用者に見放され、再建のために一時国有化されることになった。
廃業や解散は避けられたらしが、つぶれていてもおかしくなかつた。
信頼と信用は違う。

映画「フライト」の機長は、機長として信頼に足る男だった。

しかし彼はアル中だった。

彼は友人らに囲まれて、断酒することになった。

彼は酒をやめると言つた。

けれども、アル中の言うことなんて信用できない。

アル中の言うことを信用するなんていうことは、アル中の當人にとつて残酷なことだ。

酒を飲まない、と言つてていることが、信用できるなら、その人はアル中ではないのだ。

アル中になつた人は、もう根治はしないので、以降はもう、アルコールをひたすら拒絶する、ということしか対処法がない。

そのまま本当にアルコールを断絶できている人もいるが、そうした人は、奇蹟の中にいると言つていい。

どうせダメになる、とは思わない。

わたしは奇蹟を信じる者だからだ。

わたしがアテにするのは奇蹟であつて信用ではない。

当人が、奇蹟を拒絶したら、そのとたん、もう呑み込まれていくだろうな。

アル中に限らず、依存症というのはそういうものだし、依存症にかぎらず、ひとのこころとはそういうものだ。

もしひとのこころが信用だけで戦えるものなら奇蹟なんて必要ねえんだよ。

けれども、とにかくマレーシア航空は「危険」というイメージがつく。

イメージも何も、行方不明になつて、墜落して、人が死んでいるのだから、危険だと人は確信する。

それはともかくとして、映画「フライト」の機長は、機長として信頼に足る男で、アル中として信用できない男だった。

では機長は、男としてはどうだったか。

それも、アメリカの男として、信頼に足る男だつたろうか。

そのことは、映画を観て確認してくれ、胸に突き刺さるとしてもいい映画だ。

われわれはここ数年、信頼できる人を、叩く、つぶす、破壊する、ということにかまけてきた。

具体的は出さない、具体例なんか出さなくともわかるだろう。

他ならぬわれわれ自身がやっていることなのだからわからないはずがない。

なぜ信頼できる人を、叩き、つぶし、破壊しようと努めてきたかというと、それはやはりさびしさのせいだ。

これにかかる不特定多数の全員が「さびしい人」だということを、われわれは直観において知っている。

ルイ・アームストロングが唄うのを真に受けながら、光輝に満ちてそのような叩く・つぶす・破壊するをやつてきたわけじゃない。

さびしさに駆り立てられて、そのようなことをやつてきた。

さびしさ、つまり、自身が「信頼」に至れないということ。

自身が信頼に至ないので、信頼できる人を叩くという発想と衝動に駆られた。

もちろんこのことに、個々人のこころあたりはない。

こうしたことは、集合的に起つており、集合的無意識がわれわれを支配していく、われわれ個々人はその集合的無意識のあやつり人形だから、個々人にこころあたりはないのだ。

あなたは面倒くさがるかもしれないが、大切なこととして、次のような話をしよう。

面倒くさがらずに、なるほどそういうものかと理解するよう読みなさい。

あなたがいま、叩かれているなあ、つぶされたなあ、破壊されたよなあと思える人を、五人ばかり思い浮かべなさい。

彼らについて、あなた自身がどう思うか、あなたの心境はどうであるか。考えてみる。正確に述べてみようとする。

そうすると、「ぐわーん」と、頭が揺れるような感じがして、思考はは行方不明になり、感情は無意味に攻撃的になるだろう。

そんなふうに、「ぐわーん」となつて、あれこれ迷うけれど、けつぎよくのところ、そうして叩かれたものについてあなたは否定的なはずだ。

つまりあなたも、本当に擁護する側にはもう立てないということ。

すべては無意識側で起つてることなので、あなたはこのことを明確に捉えられない。

捉えようとしても「ぐわーん」と頭の中が揺れてきて、あなたは眠くなつたり、思考が混濁したりする。

（無理をすると精神に強い負担が掛かるので、無理はしないように。けつこう簡単に心身症になることがあります）

さてここで、あなたをタイムワープさせる。

タイムワープ！

あなたは十数年前の時代に戻つた。

あなたはそのとき、さきほど思い浮かべた五人に對して、否定的に攻撃する心境を持っているだろうか。

タイムワープした直後は、まだその心境が残つてゐるかもしれない。

けれども半日も経たないうち、あなたのその心境は消え、別の心境に乗つ取られるのだ。

十数年前には、世間において、その五人はまだ、集合的に否定や攻撃をされていなかつたからだ。

これはいわゆる同調性バイアスなどではない。

あなたのこころはあなたのものではないのだ。

あなたのこころは75%、他人のものであり、世間のものだ。

だからあなたのこころは常に世間に乗つ取られる。

世間に乗つ取られるので、その世間の側が変化すると、あなたのこころも変化する。

あなたのこころに連続性なんかないのだ。

さつきまであなたが自分にこころに確信していたことは、いまこのときあなたが確信していることと、まったくつながつていない。

あなたの思い浮かべた五人は、十数年前には、集合的に否定・攻撃されないので、その時空に立たされたとき、あなたの心境からもその否定・攻撃され

警は消えていつてしまう。

そしてあなたは、その時代が、二〇二五年ほどにはさびしくなったのだということを知るだろう。

その時代、人々はまだ、信用のイメージよりも、直接の信頼というものを

いくらか持ち合っていた、ということを知るだろう。

すべてはあなたのせいではないし、かといってすべてはあなたの功績でも

ない。

その時代ごとの、世間、その集合的無意識が、個々人のこころを乗っ取つているだけだ。

さてタイムワープはおしまいだ、現代に戻つてきなさい。

渋谷区・目黒区・世田谷区においては、いまでも毎夜のように、ちゃんと

若い人たちがお酒を飲んで大いに盛り上がつている。

中には、若い人のふりをしているだけの人もあるけれど、それはもう言いつこなしだ。高齢化社会なのだからしようがない。だいいち、それについて

はおれも人のことをまったく言えない。

盛り上がつている中、女の子たちはみんなものすごくおしゃれで、魅力的で、かわいらしくて、セクシーで、清潔だ。

もちろんダメな感じの女性もいるが、それはいつの時代だつて同じだろう。それも言いつこなし、というかわざわざそつちのほうに注目しない。

かわいい女の子たちに対比して、男たちは、やっぱり単に声がデカい。最近は身体を鍛えている人がすごく多く、その体躯はいかつい。それを見つけるよう振る舞う。それで、肉体派の男はオラついていたり、そうでないフェミニン派の男は気取つてクールに振る舞つてたりする。

どちらであれ、その場でお目当ての女の子たちにウケているのであればそれでいいだろう。グッドジョブだ。もちろん少々スベつてゐる人もいるが、それだつてやはり、わざわざそつちのほうに注目しない。

みんな年齢なりに、とうぜんの若さがあつて、かといつてガキつちいというわけではない。

盛り上がりながら、みんなちゃんと大人だ。

どちらかというと、おれのほうが大人じやない。

おれは大人じやないからな。

というわけで、やはりいつの時代も変わらず、年長者ほどナウなヤングを称揚すべきだと思うのだが、一方でわたしの内に、余計な空想も立ち上がつてくる。

大きな声でオラつき、女の子たちにウケている（と思われる）、いかにも中心的な存在感を放つてゐる男に、

「お前のこと信頼している人つて、ひとりもおらんだろ」

そんなことを空想する。

これはあまりにもひどい。ひどいというか、これではわたしがただの陰キャだ。

「お前のこと信頼している人つて、ひとりもおらんだろ。それどころかお前自身も、周りの人を誰ひとり信頼していないだろ」

だから本当はさびしいんじゃないのか……

これはなんという陰キャ発言だろうか、こんなものまったく謂（いわ）れのない誹謗中傷でしかない。

まったく謂れのない誹謗中傷であればそれに越したことはない。

本当にそう思う。正直、ずっとそのように祈り続けているところがある。

しかしかわいだらしくは内心で思うのだ。

「彼らは信頼しあつてゐるのだろうか？」

盛り上がつているのはわかるし、楽しいのもわかる。女の子はみんなおしゃれでかわいい。魅力的でセクシーだ。

酒に酔えば、みんなして肩を組みだすほど仲が良い。

彼らは信頼しあつてゐるのだろうか。

こんなえげつないことを、若い人は考えなくていい。

精神に負担のあることだ。

だから代わりにわたしが考へてゐる。

【怒号】仕事まじだりい、遊んで暮らしてえ、超セツクスしてえ、ワンチャン仮想通貨で勝ちたい、そんでFIREしたい、推しがマジやばい、誰かおれを養つてくれ、これエロくね？ マジ有名になつておいしい思いをしてえ。

ちょっとマジむかつく、ちょっとマジありえないんだけど。

彼らが大声で言っていることは、決してウソではないと思う。彼らの本音であって、楽しく酒が飲めるだけ本音をぶちまけあうというのもまったく悪いことではないのだろう。

だが彼らが本心から何を話し合っているのかはまったく聞こえてこない。

「これちょっとマジトークなんだけど、あのさあ、マジですか」

マジトークと言っている、その意味はわかるが、それは「本気で焦つていい」という意味でマジなのであって、本心から何かを話すということの前置きではない。

そもそもわたしは「マジになる」ということじたに否定的だ。

先の段で、わたしは料理について本心から話したが、そんなどうでもいい話、まさかマジになつて書いたわけはないだろう。

わたしの関心とどうか、わたしの焦点はただひとつ、次のことにある。

「彼らの本心は、さびしいのだろうか？」

むろんそんなことを、彼らに訊いたり、聞いたりしたりする意図はない。

そりやそうだろ、誰がそんなマジな話をしたいものか。

わたしの関心は、その一点に向かっているが、それを聞きたいかというと、聞きたくはないし、仮に聞かせてくれると言つても、わたしはお断りしてひとりで帰路につくだろう。

わたし自身はどうだろうか、わたし自身はさびしいのだろうか。

それついては、正直なところ、もうずっとむかしに、わたしは自分を信頼するというふうへ自己決定してきたので……

仮にわたしが「さびしい」なんて言い出しても、あまりに説得力がなさすぎるだろう。いわゆる、へそで茶を湧かすというやつになるはず。

おれなんかはそれでよろしい。

わたしが生きているうちに得るべきこころと魂の何かが、トータル 10 ポイント必要だったとしたら、わたしはそれをすでに 4,000 ポイントぐらい頂いている。厚かましますぎるのだ。

そんなことはどうでもいいとして、仮に彼らが、本心においてはじつは「さびしい」ということがあつた場合、冒頭で示した疑問についてはいちおう整

合がつく。

本心においてはさびしいから、自殺をさやきかける鬱ソングばかりこころに染まる。そういうものが流行する。

一方、さびしさを慰めるために信頼できる人を叩いて破壊することばかりにかまけてきたから、本心は大ごめんなさい大会になる。

侵略的な「ホンネ」ばかりが、四方八方から滲（し）み出してきて、誰も本心から話してくれないから、誰ひとり信頼できない。

だから侵略に対し反発的にブチギレ攻撃が出る。こころの声は「うつせえわ」になる。

一方で、冷静な視点としては、自分自身もその侵略的なホンネを滲み出させらばかりで、本心から話すわけではないというのも知つていて。だから、それについて「大ごめんなさい」となる。ブチギレと反撃とごめんなさいが混在して、女性の場合などは「可愛くてごめん」になる。

つまり、

・侵略してくんな！

・こつちはもつとドギツいホンネで反撃しますけど？

という精神の態勢ができる。

この十五年間にあつたことを、やはりわたしは、皮膚感覚では追跡しきれていない。

いま、こうなつているのではないかという捉え方はできるが、なぜこうなつてきたのかということを捉えられない。

本当はさびしいのではないだろうか。

本当はさびしいということをわたしが責めているのではない。

当たり前だ、なんで人がさびしいのを、わたしが責めるんだ、そんな文脈はありえない。

さびしさに、向き合えていないという問題はある。しかしそれだって、責めるような筋合いのことではない。

わたしが思うのは、このことへの対抗手段、さびしさへの対抗手段がない

のではないかということだ。

対抗手段がないと閉塞に陥らざるを得ない。

推し活でさびしさが解決するというのは誰が見ても無理がある。

大金持ちになつて豪邸に住み、上等な異性をゲットして、海外旅行をしまくり、それらをSNSで拡散して自己顯示欲や自己承認欲求を満たしたとしても、やはりさびしさは解決しないだろう。

誰とも信頼関係はないのだから、どんな家族を得て、どんな友人と酒を飲み、どんな土地を旅し、どんな人々と交流し、どんな芸術に触れても無駄だ。

信頼ということから切斷されている以上、何をどうやつても無駄だ。さびしさの中に居続けるしかない。

こうなつてくると、人は早晚、宗教に行き着くのがわかる。

宗教 特にカルト宗教は、

「この教祖は、特別な人なのです、わたしたちは教祖により、特別な絆で、結びついています」

という感じで迫つてくるから、さびしさから脱出不能になつた人は、このカルト宗教の言い分にすがりつくしかなくなる。

信頼って何なんだろうな。

信頼って、そんなに珍しいものだつたつけ。

信頼って、かつてはもつと、当たり前というか、むしろそつちが土台にあつた気がする。

諜報部員の人は別にしてだ。

諜報の世界においては、標語として、

「ママが愛していると言つても信じるな」と言われる。

そりや諜報部員だからな。

諜報つてつまりスパイのことね。

戦時下というのはこのスパイの常識がすべてにおいてそのまま罷（まか）り通るから困る。

また、諜報の世界においては、人はカネで転ぶ、ということになつていて、人はカネで裏切るのだ。

人が、カネで裏切ることがある、ということではなく、人はカネで動くという力学が前提になつていて。

もちろんごくまれに、カネで動かない人、カネで裏切らない人、カネで転ばない人もいるのだが、それは特殊な人というか、変人だ。

幕府がいくらカネを積んでも吉田松陰は寝返らなかつただろう。

だから、吉田松陰は、信頼に足る人だつた。

ということは、カネで転ばない人はつまり、さびしくない人なのかもしない。

人は、カネで転ぶし、弱みで転ぶし、ついでに男性は女で転ぶ。（あともちろん暴力でも転ぶのだが、それはあまりに悲惨なことなのでここでは描写しない。暗殺を予告されると政治家は転びます）

大学のテニスサークルAで活躍していたサークル長のAくんがいたとする。テニスサークルAには色氣がない。一方、ボウリングサークルBが美女ぞろいで、そこに入れば美女を喰い放題ということになると、Aくんは、ボウリングサークルBに転属する。そりやそりや。

転ばなければAくんは変人だ。狂つていて。

Aくんは、ボウリングサークルの金持ち美女B子に、性的に変態と言える写真を撮られ、弱みを握られてしまつた。

ただAくんが、テニスサークルを辞めてボウリングサークルに所属するなら、その写真を表沙汰にしないでもらえるし、それだけでなく、Aくんは広いマンションと高級外車を買い与えてもらえるということになつた。

どこからそんなカネが出てくるというのか。

B子の財力をもつてすれば、そんなものは何でもないんだ、ということだつた。

「ね、だから、何も悪い話じやないでしょ。わたしたちと楽しくやりましょうよ」

B子は親しきに微笑む。

するとAくんはどうなる。

Aくんは、ボウリングサークルに転属し、弱みが表沙汰にされない、とい

うことを選ぶ。

それどころか、広いマンションと高級外車を買い与えられ、しかもおこづかいでもらえるから、これまでやつていた引っ越しのアルバイトという肉体的にきつい労働をしなくて済むようになる。

あのうざったい社員ドライバーと、せまつ苦しい車内を過ごさなくてよくなつたのだ。

解放されたあ、と感じる。

Aくんは八万円のサングラスを買い、十五万円の靴を買った。

潤沢に使えるカネがあるということは、Aくんに単純かつ強力な自信をもたらした。

それで、ボウリングサークル以外の女の子からも、ちやほやされてモテるようになつた。

まわりが僻（ひが）んでも、無駄無駄、じつさい使えるカネが潤沢にあるので、

「ごめんね！」

機会を掴めない奴に、才能がないということ。

ゆくゆくは就職先もB子からあっせんしてもらえるだろう。

そして彼は、買ってもらった広いマンションで、学生のあいだ、ボウリングサークルの美女たちその他と、好きなだけセックス三昧をする。ちょうどボウリングサークルには、あつらえたように彼好みの美女が色とりどりにいて、しかもなぜか、みんな驚くほどAくんに従順だ。

どんなプレイを要求しても、女の子たちは断らない。

それどころか、イヤな顔ひとつ見せず、むしろうれしそうにほほえんで、そのプレイ指示に従つてくれる。

「もつとわたしたちに、命じてくれていいのよ？」うふふ

いいなあ……

これはAくんの人生にとつて、最上の展開であつて、これを否定するよう

では、もうAくんは生きている意味がないではないか。

これの反対側にあるのは何だ。

これの反対側にあるのは、Aくんが色気のないテニスサークルに残り、変態の証拠写真をバラまかれ、すべての知人から消えようのない「変態でサイテー」「キモい」「クズ」の烙印を押され、知らない人からさえクスクス笑われ続け、年下にネタにされ続け、サークル長の座を追われるどころか、テニスサークルから追放されるというコースだ。

世間に知れ渡つたド変態をサークル長にしていられるわけがないし、そんな奴がかつてサークル長だったというだけでもまずいので、サークル員たちは彼の名を名簿から除籍するだろう。

彼はその後、友人もなく孤独に、狭いアパートに住み続け、大家に「この変態つてアンタらしいな」と写真を突きつけられ、呆れられ、それでも頭を下げて住まわせてもらい、あとはえんえん、肉体的にきつい引っ越しのアルバイトを続けることになる。

社員ドライバーの体臭が今日もキツい。

何日も歯を磨いていない口元を、社員ドライバーは爪でほじくっている。

「あのさあ、お前つてさあ、六十歳のババアとか抱ける？」

「……さあ、どうなんですかね」

「アソコがめっちゃ臭かつたりしたらどうする？ そんで、舐めろとか言われてよ」

「さあ、どうするんでしょうね」

「お前つてチンコ何センチあるん？」

「測つたことないですね」

しんどい。

この差分において、前者と後者、Aくんはどちらを選ぶべきなのか。

こんなもの、もはや考えるまでもない。

冷静に理知的に考えろ。

Aくんは後者を選ぶべきだ。

前者なんか選んでどうする。

ん？

書き誤つたのではないぞ。

後者はたいていクソだが、自分にふさわしいクソじやないか。何の不満が

ある。

前者は自分にふさわしくない大クソだ。

どちらを選ぶべきか、目を覚ませバカタレ。

元いたテニスサークルを除籍され、あらたに、個人でテニスサークルで立ち上げる。

もちろん入部者なんて誰も来ないだろうから安心しろ。

毎日、新入部員を待ち続けてひとりで活動しろ。

カネに転ばず、弱みにも転ばず、女にも転ばなかつたAくんは、テニスサークルを追放されて、悲惨なバイトを続けているけれど、なおも自分でテニスサークルを立ち上げて、その運営をやろうとしている。

このAくんは「変態でサイテー」「キモい」「クズ」なのか？

もちろん、信用は恢復しないから、信用調査においてはそのとおり、変態でサイテー、キモくてクズだ。

でも信頼においてはどうか。

信頼においては、たぶんわけのわからない変人だが、信頼はゼロではない。自分が何をやるかを、自分で決める奴なんだという一点で、信頼はすでに生まれている。

前者のコースを選んだとき、Aくんは生涯、自分のことを信頼できないし、他の誰のことも信頼できなくなる。

「信頼」のほうで調査すれば、前者のほうがサイテーでキモくてクズつてことじゃないのか。

あくまで「信頼」のほうで言えばな。

Aくんが後者のコースを選んだとして、その後のAくんに、まともな友人や青春が得られるのかどうかは知らない。

Aくんと信用付き合いしてくれる人はいないだろう。

社会的信用性はゼロどころがマイナスだからね。

だが、世の中にはまだ「信頼」のほうをアテにする人が残つていたら、Aくんのところにはやがて、Aくんを遠くから見ていた人がやつてくるだろう。

その人は、

「お前、すげえよな」

とおずおずと言い、その信用のガタガタぶりとは裏腹の、わけのわからぬ信頼を認めてくれるだろう。

Aくんが、

「部室の前を、たがやして、花壇にしよう」と言い出したら、他の部員たちは、返事をする前に了承して引き受けてい

るだろう。

そうしてAくんが、信頼をもとに友人たちを得た場合、彼らは都心で酒を飲んだとしても、

「それな」

「ワンチャン」

「マジさ」

という怒号をやりあわないとと思うのだ。

Aくんのホンネには、黒歴史がなければよかつたのに、と嘆く気持ちがゼロではないかもしれない。

けれどもAくんは、あたらしいサークルを、本心から運営しているだろう。もはやAくんには本心しか残つていらないからなあ……。

友人と酒を飲むときも、本心から飲み交わすんじゃない？

卒業間際、Aくんが、女性であるあなたに、「あなたのことがずっと好きでした。僕は、こんな奴ですが、卒業してからもあなたと会いたいと思つています」と告白したとする。

あなたはそのとき目の前のAくんを、

「変態でサイテー、キモい、クズ」

と感じるのだろう。

社会的信用としてまったくそのとおりなのではあるけれど。

誘いを受けたあなたは、Aくんとふたりで食事に行くだろうか。

あなたがAくんと食事に行くとなつたら、あなたの周囲の知人たちは、

「えええええー？」

と引きつって言い、

「マジありえないんたけど」

と爆笑し、
「やめときなよ、 あんた気が狂ったの？」
と大声を出す。

全員で、

「きつも～」
と合唱する。

社会的信用においてはAくんはそのように評されるとおりの人だ。
あなたは誰を信頼するか。Aくんか、それとも周囲の知人たちか。
ここまで話聞いていたら、あなたはAくんを信頼するほうを選ぶだろう。

けれども、せつかくなのでここで知つておくといい。
人は「転ぶ」のだ。

さつき述べた通り、人は力学のとおりに転ぶ。

じつさいのケースでは、あなたは周囲の知人たちの圧力に負けるのだ。

あなたがAくんの信頼のほうを選べば、そのことは、あなた自身の信用評価を下げてしまう。

あなたはいろいろ、やつていけなくなる、と感じる。

あなたは選択肢を限られ、限定され、狭められていく。

諜報においては基本的な考え方だ。

力学はあなたにAくんを選ばせない。

「まさかすがに、アレとふたりきりで食事までは無理だわ。ネタにできる範囲を超えてるし、なんかわたししまでいわくつきの奴にされそうで怖いw」

あなたは合理的な、ほとんど唯一の選択をする。

その選択は正しいのだが、それ以来、あなたは自分が信頼できなくなつて、ある種のさびしさの中を生きしていくことになる。

これは、そうなるぞとおどかしているのではなく、そういうものなのだ、とジジイみたいな通告をしているにすぎない。

人生なんてそんなものなのさ。

(おれの場合を除いてはね)

あなただけでなく、他の誰もが、そうして自分を信頼できなくなるという
ことを積み重ねてゆき、次第にさびしさを濃くしてゆく。

その中を生きていくことになる。

その力学、「信用のために信頼を放棄せねばならない」という力学に、逆らうすべはほとんどないのだが、せめて生きているうち、なにかひとつでも残せたらいいな。

そんなふうに思わないだろうか。

あのときの自分は、信頼に足るものがあつた、と。

そんなことが、ひとつでもあれば、人はじゅうぶんに誇れるものを持つて生きたのだと思う。

さびしさはしようがないけれど、何もかもがさびしさではなかつたと、わずかながらそれ以外のものもたしかにあつたのだと、そのことは胸を張つて断言できるじゃないか。

そうして、信頼できる「あのときの自分」をひとつでも残しておけば、あなたはヨソの誰かの信頼について、それを叩く、叩く、叩く、つぶすというような衝動に、呑み込まれることはなくなるはずだ。

たぶん……

たぶんだけどね。

さびしさに呑み込まれた人は、誰とでも社会的信用の野合を企み、ヨソの誰かの信頼を叩く。

もはや信頼アレルギーというような様相になつて、血まなこで叩くのだ。

社会的に「ちゃんとしている」「ふつうの」「何も悪いことをしていない」自分たちが、まさかAくんみたいな訳アリ物件より、信頼においてはいどが低いということになつたら、そんなことはまずいだろう。

そんな屈辱的なことを受容できるわけがない。

だから信頼という事象じたいを叩く。友人でない人たちと野合して叩く。信頼という事象じたいを否定しようとする。

「身内でもない者がさあ、信頼とかつて基本ウソでしょ」

一般的にそういうものだからこそ、諜報の世界では、人はカネで転ぶとい

うことが力学として信用されているのだ。

そのことは、なにも諜報部員でなくても、社会人を何十年とやつてきたおじさんたちやおばさんたちだったら、みんなこつそり知つてはいるのである。それは単純に人生経験というやつだ。

あの人はカネでは転ばなきそ�だよね、というイメージ。弱みとか撥ねつけそ�だよね、というイメージ。セックスなんかじや落ちないよね、というイメージ。そうしたイメージは、どこまでもイメージでしかないということ。イメージがどうであつても力学によつて転ぶ。

大人たちはみんなそのことを知つてはいるのだ。

だから、おじさんたちとおばさんたちは、いつもどうしようもなくさびしそうだろう？

ちなみにおれはどうなのかといふと、おれはそんなことぜんぜん知りません。

おれは大人じやないからな。

眠たいこと言つてんじやねえ、おれならボウリングサークルの美女たちをテニスサークルに引きずり込むよ。

そして金持ちB子が、何も持つてないおれに転ぶ。

そういうことではないと、話として何も面白くないもんな。

はち

みつ

なすび

ペネームはちみつなすびさん、こんにちはよろしくお願ひいたします。きょうも架空ですが対談よろしくお願ひいたします。まず、そちら通信の具合はいかがでございましょうか。通信状態は、はい、良好でございますか。それなげっこうでございます、それではあらためてよろしくお願ひいたします、しばしのあいだお付き合いくださいませ。

えーっと、子供のころに、字がへタクソすぎて、数字の8を三つ書いたところ、小学校の先生に「これはなすび？」と訊かれて、いたく傷つきました！とのこと。それでハチがみつで、それがなすびって言われたものだから、ハチ、みつ、なすび。はちみつなすび、と。いやあなるほど納得させられる立派なペネームです。どうなんでしょうね、はちみつなすびって。食べる前からいかにもおいしくはなきそうですが、食べてみたら案外いけるかも知れません。はちみつてけつきよく何にでも合いますしね。えー、もちろんいま現在は、へたくそな字は克服し、ちゃんと数字に見える8を書けるそうです。よかつたですね、人間なんでも努力つてもので。なすびに見える8もちょっと見てみたかったですね。それでは、本題にまいりましょ、はちみつなすびさんから恋愛相談をいただいております。

はちみつなすびさんは現在、交際して三ヶ月の彼氏さんがいるとのこと。おめでとうございます。それで、はちみつなすびさんは、ご自身でおっしゃるところ、男性にはぐいぐい引っ張つてもらいたいタイプ。そうですね、そ

ういう方はやはり女性で多くいらっしゃると思います。最近ではこんなことを言うともう女性差別だなんて言われちゃいますけどね。えー、ぐいぐい引っ張つてもらいたいタイプで、彼は頭もいいし体つきも立派なので、ついついそのことを期待しちゃいます！ とのことです。しかし彼には弱気なところがあり、その原因を聞いてみたところ、どうも元カノのことを引きずつているようだとのこと。そんなことわたしに関係ないじゃーん、と、泣きべそマークが書かれてあります。なるほどねえ。

これが交際して一ヶ月記念の写真です、ということでお、SNSのアカウントから写真を頂戴しております。えーっと、年齢は不詳とさせていただきますが、とにかくまだお二人ともお若い、まだまだ元気いっぱいのお年頃ですが、とにかくまだお二人ともお若い、まだまだ元気いっぱいのお年頃ですが、ここでじつに楽しそうなお二人で何よりです。それは何よりなのですが、ここで一点。時代を感じるわけですけれどもね。

わたしとしては、世代のもののかもしれませんが、こうしてお付き合いしているお二人が、付き合っているぞーという形でSNSに公開されているのは、なんだかびっくりしてしまうんですよ。しかも写真付きだからドキッとしちゃう。あくまでわたしとしてはですがね。いまはこういうことが標準的なかもしれない、重々わかっているながらも、どこかどうしてもびっくりさせられちゃう。時代錯誤とは知りながら、お二人のことは、お二人のうちに留めておくもんじゃないと、そんな古めかしいことでもどこかで思うんですよ。ここはね、もちろんそれぞの考え方なんですけど。だからこそ、あえてね、古い世代からはこういう考え方もあるぞーということをアピールさせてもらいました。何か少し参考にでもなればと思います。おじさんの話でごめんなさい。

それで、えーと。彼氏さんの、元カノという人。その元カノさんの、SNSアカウントもいただいておりまして、それぞれ写真を拝見しております。それぞれ、というのはですね、これつて元カノさんが二名、いらっしゃるということですね。片方はたぶん同い年ぐらい、もう片方はちよびつとだけ、年齢が上の女性でしようか。そしてお二人とも、わりかし派手なタイプの女性という感じです。それぞれのご職業も、SNSの自己紹介には書かれているんですが、個人情報ですのでここでは控えさせていただきます。お二人と

も、なんというか、ごくふつうの、お堅い職業についていらっしゃるということです。それで、この元カノさんの、片方をユキちゃんと呼ばせていただきます。というのは、スキーがお好きなんでしょう、雪景色の写真がパツと見て多いのです。でも、もう一方の元カノさんを、ちょびっと年上かな、のウミちゃんと呼ばせていただきましょう。理由は同じ、海がお好きなのか、あるいはそういう場所にお住まいなのか、パツと見ると海のお写真が多いからです。

で、直近で別れられたのは、えーっとユキちゃんのほう？ そして、ユキちゃんからさらにはかのぼつての元カノさんが、ウミちゃんということですね。すると、ウミちゃんと付き合つていたころは、彼氏さんのほうはまだ学生さんだったということでしょうか。そんな感じですよ。はい、それで、彼氏さんが引きずつて元カノというの、どちらなんでしょうか。それが、このどちらでもあるし、はちみつなすびさんからすると、どつちがどつちなか正直わからなーい（笑）と。そりやそうですよね、元カノふたりの話をされても、聞かされている側はどつちがどつちなかわからなくなりますよね。

いやあそれにしても、やはり驚かされるなーとは思うわけです。というのはね、その彼氏さんの元カノさんを、言つてみれば二代にわたつて、こうしてSNSから写真で拝見することができるわけでしょう。そりや、当たり前のことなんですけれど、やっぱり驚きがあるんですね。そのテクノロジーじたいに対してもそうなんですが、その、彼氏さんが、はちみつなすびさんに歴代の元カノをアカウントごと紹介するというか、展示するというか、そのことがやっぱり不思議だなーって思うんです。

いやわれわれの世代でもね、古い卒業写真なんか出してきて、お前どの子と付き合つていたの？ みたいなやりとりはするんですよ。でもそれってどこまでも過去のものでしょ。それはもう、すんげーむかしの思い出話みたいなノリでね。一方、SNSのアカウントというのは、なんというか、現在進行形で生きているのですからね。なんか、やっぱりびっくりしちゃうんですよ。たとえばわれわれの世代ではね、仕事の同僚とか、そういう何でもない知り合いのアカウントでも、やっぱ見ちゃいけないって感じがするんですよ。

よ。なんだか他人のプライバシーを勝手にのぞき見しているような感じがしてね。いやそりやもちろん、当人が公開しているわけですから、誰でも自由に見ていいんですけれど、そのことはわかっていても、なんだか気が咎めるわけですよ。このあたり、新時代の感覚についていてなーい、というのがね、こっち側、おじさんたちのどうしようもない事実なんだと思います。

話を進めてまいりましょう。はちみつなすびさんは……あ、ちょっとここでね、お名前が長いので、ここではちょっと短縮して、ハチさんと呼ばせていただきますね。ハチさんは、男性にはぐいぐい引っ張つていてほしいタイプで、さらに言えば、夜の、えーっとそういうことについては、やはり野性味あふれてガンガン来てほしい！ というタイプ。なるほどね、ワイルドなやつでね。少々のことならかまわぬからガンガン来てほしい、と。大胆に書いてございます。ワオ。この少々のことと、いう塩梅はまあ、じつにむつかしいところですけれども。若い彼ならじゅうぶんにいけるところじゃないですか。彼氏さんは身体的にはたくましいタイプと伺つておりますから、まさにね。えー、ここにはつきり書かれてありますのは、おつかなびっくり来られると、こつちも乗り切れなくともやもやするからやめてくれー、と。男ならガツンと来てほしいカツコ笑いと、率直なところが書かれてあります。いやあなんかすいません。代わりに、ぼくが謝っちゃいます。なんだろうな、なんだか申し訳ないですほんと。

その他の点というと、彼の、いい点も書いてございます。彼は、約束したことなんですけれど、やっぱり驚きがあるんですよ。そのテクノロジーじたいに対してもそうなんですが、その、彼氏さんが、はちみつなすびさんにはかなりきつちり守るタイプ。ああ、そうなんですね。いいですね、そういう人つて、尊敬しますよね。パンクチュアルな人。あー、時間に正確な人つて、英語では特別にパンクチュアルっていう、そういう形容詞があるそなんですよ。きっとそれだけ大事なことなんでしょうね。できる人は偉いですよ、パンクチュアル。それで、ハチさん自身は、時間にルーズなところがあるの、自分とは対比があつてかなり好きーと。ありますねえそういうこと。自分と違うところを持っているというか、お互に補い合えるところがあるというか。

しかし、その彼が、デートの最中、ちらちらと通りすがりの他の女を見ることがあります、そのことに死ぬほど腹が立ちます、マジきもー！ だつて。一

度それであまりに腹が立つて、その場できびすを返して、デートをやめたことがある。そうです。うわーこれはキツい。手厳しい。これはお互いにキツいですね、聞いてるだけでこっちが縮みあがつちやう。そういうのはねえ、男はねえ、野暮天というかマナー違反というか。あるいはそんなことじや済まねえよテメエというか。何はともあれ、そりやあ少なくとも彼の側はとつてもブルーになつたと思います。それでその後、何でしよう、彼にイタリア料理をおごつてもらつて、ちゃんと仲直りしました。いいお店だつた！と書いてあります。なるほどね、いいですね。そういうのはね、おいしいもの食べて仲直りというのが一番です。せつから付き合つていてるのにギスギスしてもしようがないってことは、もうお互いわかつていてるわけですから。えーとそれで、彼氏さんは、箸づかいは良いけれど、ナイフとフォークの使い方がヘタでみつともないので、そののところを絶賛教育中のことです。あと、デートなんだからこつちと食べるペース合わせろ、カツコ怒りつて書いてある笑。これおれも笑えねえなあ……これねえ、いやあそういうのあるんですよ。どうしてね、男の子なんて子供のころどこか早食いも芸の内つて褒められるもん、なかなかねえ、いい年になつても食事の仕方が荒っぽいってことあるんですね。健康にもよくないので、それはどこかで修正していくつたほうがいい。がんばれ彼氏さん、応援しています。

そしてここで、ハチさんのご友人の、ふるるちゃんのお話です。ふるるちゃん、とてもかわいらしいお名前ですね。ふるるちゃんは、学生時代の同級生で、ハチさんがとつても尊敬しているご友人だそうです。すばらしいですね、そういうのうらやましいかぎりです。そしてふるるちゃんはつい先日、十歳年上の男性と結婚しました！ とてもすばらしい結婚式で、ウェディングドレスのふるるちゃんが超キレイで、集まつた同級生はみんな泣いちゃつていました、とのことです。まことにおめでとうございます、ふるるちゃんと、新郎の方、どうぞ末永くお幸せに！ 新婚旅行はどこに行つたのかな、ああうらやましい。

なんでもふるるちゃんは学生のころ、どうしても留学したい先があり、けれども学校側ではそのツテがなく、えーと……その具体的な留学先はここでは伏せておきますが、たぶん留学先としてはレアなところだと思います。

どこの国だこれ。彼女はその留学先に、なんと自らで掛け合つて、当地にまで押しかけて説得して、自分を留学生として受け入れさせたのだということです。いやーすごいですね、なんというガッツというか、馬力というか。やりたいことはなんとしてでも実現させる！ そういうふるるちゃんのことです。わたしは超マジで尊敬しています、これからもよろしくね、とのことです。ああ友情、友情は、げにうつくしきかな。

それで、そのふるるちゃんからすると、ハチさんが付き合つている彼つて、うーんどうなのーと、いささか疑問符がつくようです。なるほどね。ふるるちゃんから見て、ご友人のハチさんのね、交際相手ということになれば、たしかに気になるところ、虚心じやいられないということはとうぜんあると思います。それでハチさんとしても、ふるるちゃんのことを尊敬しているぶん、どーなのーと疑問符つきで言われると、とても迷つてしまふ、と。かといつて別れる気はないけれど、自分の相手はこの人でいいんだろうか、結婚のことをとか考えると……そんなこんなで考え込むと次第に落ち込んでいつしまうんです、というのがハチさんのお話です。そののところねえ、ハチさんとしては、彼にこそぐいぐい引っ張つてもらつて、わたしの落ち込んだ気分なんか吹き飛ばしてちょうどいい、つてところですね。それなのに、元カノだの何だの、引きずつていてるとかで、そんなのどうしようもないことで、もやもやさせられて。ああやりきれない。わたしにどうしろっていうのよと、そういう気持ち、じつによくわかります。

そういうわけで、これからその彼とのことを、わたしはどうしていつたらよいでしょうか、どうかわたしに愛の真実を！ というのがハチさんからのお話です。はちみつなすびさんからのお話、たしかに承りました。

さあて、どーなんでございましょう！ ありや、ふるるちゃんの口調が映つちやつたかな。伺いました、お話の全体を通してですねえ、うむむ。全体を通して第一に感じるのは、ハチさんから見て交際相手の彼というのは、まあずいぶんな攻撃対象なんだなーということでしょうか。これはね、何も珍しいことではなくて。これも言つてみれば先ほどと同じ、この時代の、標準というやつなんだと思います。

これはね、いま、あちこちから話を聞いて、通底しているひとつの大前提

という感じなんです。女性からの恋愛相談というと、第一に、交際している男性に対する、まあ要するに攻撃なんですな。いつもの定番で、何であれば王道でさえあるなというところなんです。これは、古いことばで言うと憥気講（りんきこう）と言うんですけどね。これはもう、ことばが古すぎて、逆にわかりにくくなるので忘れちゃってください笑。まあむかしからきっと、妻というのはとかく夫への悪口が絶えないものだということなのだと思いますが、現代ではそれが恋愛相談というか、恋愛の悩みという文脈になるのが特徴なんだと、かねてから思はれてるところなんでございます。

もちろん、楽しい瞬間や文句なしの瞬間もたくさんあるでございましょう。そりやあね、せつからく若いお二人が付き合っているんだから、いろんなところで楽しいに決まっていますよ。でも、どうしても気に入らない瞬間とか、どうしても楽しくなれないときとかって、ありますよね。いつもいつも、調子がいい日ばかりではないですから。そういうとき、なんというか、彼に対して堪えがたく、激しい怒りが湧いてくるんだと思います。何かもう、猛烈なやつがね。それが、現代の恋愛相談というか、恋愛にかかる話ではいちばん多いんですね。これ、言われてみればたしかにそうだ、つてことがとても多くて、ふしぎなことに、当人にとっては盲点になつていることがけつこう多いんです。

ハチさんもそういうの、友人から聞かされた話で、思い出してみればころあたりがあるんじやないでしようか。友人が、誰か男性と付き合つていて、ちよいと相談があるんだと言われて、聞かされると「これ、どう思う？」といつて、要するに何か堪えがたい怒りと攻撃が湧いているんだなあというようなこと。それで三分後にはもう、「マジ許せないんだけど」と、言いたいことが素直に出てきて、ちよつと怒りに震えているじやん、みたいな。そういうことがとててもよくあると思いますし、そのことに別にいまさら誰も、違和感を覚えるわけでもないわけです。われわれの現代の恋愛というと、そういうもんだというのが前提になるかと思うんです。マジ許せないんだけどと言われて、アーウーわかるわかる、という共感で応える。それがいま、ぶつちやけて言うところのスタンダードなんだというのは、言われてみて別に苦しいつものでもないでしよう。少なくとも、さっぱりわかりやせんというよう

な話ではないはずでございます。

これについて、男性のほうから恋愛相談みたいな話を聞かされるときはね、なんというか、男性の側がしょんぼりしていることのほうが多いんです。男性が、どうしたらしいかわからなくて、自分が情けないとか、不甲斐ないとか。どうしたらしいんでしようかって、当人が困つてしまふんぼりしている。そうして男性の側から相談という場合、けつぎよくのところ、「勇気も力もない、だらしない僕をなんとかしてください」と言うだけで、まあそれも情けないといえば情けないし、何かふざけてるような気もしますけれどね。ただ「ウチの彼女をなんとかしてください」という、交際相手への怒りとか否定とか、攻撃とかに満ちた文脈というのはあまり見かけないもんです。少なくとも、主流という感じはまったくしないわけなんです。

男性の側は、いまいち情けないですが、それでもその場合、その男性はいちおう彼女のことを大切には思つてているんだなあ、という感じがするんでございます。聞いてるかぎり、あまりその男性を褒めたたえようつて感じにはなりませんけれどね。それでも、付き合つてている彼女を大切にしたい、大切にしようとしている、ヘタクソなりに、という部分は無邪氣にある感じがするんです。

でもいまハチさんのお話を聞いてるかぎり、お話を内容はすごくよくわかるし、なーんにもおかしいところはないし、ハチさんは頼もしいばかりなんですけれど、聞いててさっぱり彼氏さんることを大切に思つていてるという感じはしないんですね。たとえば、そりだなあ、たとえばハチさんからのお話、ご友人のふるるちゃんのことは、大切に思つて尊敬しているんだなあ、ということが伝わってきます。そりやあね、当たり前です。そんなのわかるないわけがない。話聞いてりやすぐわかるでしょつてぐらい当たり前のことです。で、そのふるるちゃんのことに比べてしまえば、身も蓋もない話、ハチさんは彼氏さんることを、別に尊敬しているつてわけではないし、大切にも思つててるつてわけでもない。そう感じざるを得ないんです。といつてももちろん交際相手だから、いろいろ期待はしていると思うんですがね。でも、尊敬とか、大切に思つててるとかいうと、あきらかにふるるちゃんに対するほうが上でございましょうと、そう言うよりないわけです。

ハチさんから彼氏さんに向けている感情は、期待とか、要求とかであつて、尊敬とかいう感じではないし、とにかくことばの端々から「わたしの大切な人なんです」という感じはまったく聞こえてこないでございますな。

これね、ここ何年か、かねがね思われていることなんですが、こんなこと混乱するようなことじやないつて思うんです。整理すりやあスートと納得がいく。なかなか聞き慣れない話ですが、ここはまあ聞いてやつてくださいな。

奇妙なことですが、あえてわかりやすく言いますと、ハチさんからの恋愛相談の、その主題はむしろヘイト感情なんだ、つてことなんだと思います。そこだけ聞くとおかしいですけどね。付き合つているのにヘイトつて何だ、恋愛つて言つているのにヘイトつて何だと。ヘイトつてのはもつと憎んでいる相手に向けるもんだろつてことになるんですが。

それでいて妙に、整合するとも思いませんか。ハチさんが彼氏さんに向けて、いちばん激しく覚える感情は何か。それはヘイト感情だ。妙な話ですけれど、あらためて眺めてみるとどうでございましょう。それで、その感情は、彼氏さんに対するだけではなく、彼氏さんの周辺にも及んでいると思えてくる。だからとにかく、極端に簡単に言つてしまえば、「彼氏まわりのことは何でもかんでも、とにかくムカつく！」ということがある。この状態が、まさに現代の恋愛の主題なんだと思うんですね。それはもう、ツイッターとかそういうの御覧になつても、同じことを見つけられると思います。あ、いまはもうツイッターじゃなくてXですか。そのあたりもう詳しくわからなくなつて、じつはわたしいまだにリープだのリツイートだのの仕組みをよくわかつとらんのですがね。

なんで彼氏まわりのことになると、何でもかんでも腹が立つのか。堪えがたくムカつくのか。その直接的な理由はよくわからないんですが、そこはたぶん、セックスとかが関係しているのかなと思いますね。わたしも専門家でないんでよくわかりませんが。さつきハチさんのお話にも、何かマジきもいつて怒つてらつしやる部分ありましたものね。どこでございましたつけ。ああ、あれですね、彼氏がデート中にすれ違う別の女をチラチラ見てやがつた。それが死ぬほどムカついて、デートを中断してお怒りのまま帰つたとい

うお話でした。そのときの彼氏について、マジきもい！ という罵倒が添えられていました。女性は特に、この生理的に「キモい」ということに、なんとか、無理みを感じることが多いでございますな。無理み、つてこの使い方合っていますかね。

なんというか、恋愛とセックスが一緒くたになると、それが「キモい！」つてなる。そういうことなんだと思います。たとえばその彼氏さんが、ハチさんと付き合う前、街中にいればどうしたつてそれ違う麗しい女性なんかをチラチラ見てしまおうわけで、それが付き合う前ならハチさんはいちいちそんなヨソの男のことについて、キモいとかいつて激昂はしないでございましょう。まあ、付き合う前のことつて、いまさら想像してもちょっとアリティがないかもしませんけれど。ただ少なくとも、すれ違う女性をちらりとも見ませんつてんじや、そもそも彼はハチさんとも付き合つていませんわね。そんなお地蔵さんみたいな人、いきなり付き合おうやら恋愛やらになるわけがございませんから。

たとえばですが、そのあたりのコンビニエンスストアに行けば、棚には雑誌が並んでいるでございましょう。そして、棚に並んでいる雑誌のうち、少年誌とか青年誌とか、男性向けの本というと、やはり多くは表紙にグラビアアイドルの写真なんかが貼りつけてある。雑誌の中身はマンガなのに、表紙は女の子の水着写真なんですから、けつたいなことでございますわね。それも、季節なんか関係なし。真冬でも水着の写真が貼りつけてあって、こんな寒くないのかつて。それはつまり、季節とか水着を見せているのじやなくて、女の子のエッチな肌を見せているつてわけです。当たり前ですけどね。そういう業者は、男性がこういうものをチラチラ見てしまうということをよく知つていて、それを表紙にして、なんとか購買に引き込もうとしているわけです。女性の場合はあれでしょ、きれいなモデルさんの写真とか、宝石とか衣装とか、お化粧品とか、小顔になりますとかバストアップできますとか、そういうのが表紙に載つていると、オツと目を惹かれてチラチラ見でしまう。つまりは、そういうふうにして雑誌というのは作られていますわね。

それでね、十八歳未満の女の子だつて、そうして水着姿になつて、男性たちの目を惹くわけですよ。そういう仕事をしていて、そういう仕事のために

色々な努力をしている。それでいて、いちおうルール的には、未成年の女の子に欲情しちゃダメってなっているんでございますな。それね、欲情しちゃダメと言われましてもね。そもそも欲情しないものなら未成年の女の子は水着姿で写真集なんか撮らないでしようし、雑誌はそれを表紙に貼りつけたりしないでしよう。われわれの目つて、見ただけで相手の年齢がわかるわけでないですし、だいいちおかしいでしよう、だって十八歳になる手前の、誕生日のちょっと前まで欲情なんかまったくゼロでござりますとシーンと静まり返っていて、誕生日になつて十八歳になつたとたんチーンとスイッチが入つてハイ欲情しましたあー！ なんてことは、生きものの仕組みとしてあまりに不自然だ。ハチさんだつてそれはさすがにそう思うでしよう。そんなの無理がありすぎるって。

だから、ハチさんの言うところには、いろいろその無理つてやつがあると思うんです。だってハチさんはあれでしよう、夜の、そういうときにはその、野性味あふれてガンガン来てほしいって話でした。そうでないところも乗り切れなくて、やつぱりイライラするって。ワイルドにカモン！ つて。そういうお話でした。それがね、ハチさんの彼氏さん、約束の時間はきつちり守つて、ナイフとフォークの使い方はきつちり練習させられて、街中ではヨソの女をチラ見するようなことがあってはせつたにいげなくて、まつすぐ前だけ見ていなさいって、そうやつて制限されて制御されて、ハイそれでハチさんとホテルに入つたからには野性味をもつて大爆発しなさいって、それはさすがに無理があるんじやござんせんか。そんな、適宜にスイッチをオンオフできるロボットみたいな生きものつてあります？ そりや人間、まあ何かしらの修行を猛烈に積めば、そんなことができる人もあるのかもしれないが、それはすくなくともまったくワイルドではない。野生にそんな生きものはいませんもの。

だからこの場合、この場合というのかな、いまわれわれがいう恋愛つて、そここのところで「キモい」という、強烈なヘイトが主題なんですきつと。なんでこうなつたのか、あるいはもともとこういうものだつたのか、それは誰にもわからんけれど、さしあたりわれわれが直面するというか、この場合はハチさんが直面することですけれど、恋愛つてのは「キモい」っていう

堪えがたいヘイトが主題なんでございます。つくづくふしぎなことのように感じます、どーしてわざわざ言い寄つて密着してヘイトを主題にするの。

そんで、そのヘイトつて感情は、時代によつて風潮によつて、いくらでも変わるじやございませんか。たとえかかつて、昭和のころなどは、みんなして駅のホームで煙草をぶかぶか吸つて、それを線路にボーイと投げ捨てていたんでございましょう。そのことは、当時だつて「やれやれ」みたいに思われていたでしようけれど、いまみたいにマニアックなヘイトを爆発喚起するようなことはなかつた。

それでいえば男女差別とか人種差別なんかもそうでございましよう。むかしはやれ女子社員といえばお茶を淹れさせられていたそうですし、たとえばマンガで言えば「ジャングル黒ベえ」なんてタイトルのマンガがあつたそうですからね。いまの時代じやこんなもの炎上もいいところでしよう。ただかつては、そこにそんなマニアックなヘイトの爆発はなかつた。

たとえね、ちょっと話が長くなつて申し訳ないですが。これは、ずっとむかしの、大学生だつた友人の話なんですけれど。彼は当時、まだ二十歳になつていなかつたかなあ。彼は家庭教師のアルバイトをしていましたよ。生徒は、十五歳、中学生の女の子。彼女は勉強熱心ではなかつたけれど、次第に家庭教師の彼と打ち解けて、だんだんと受験勉強に本腰を入れていくことになつたんですつて。彼はその女の子のことを「かわいいやつよ」と言つていたけれど、そのときはそんな性的な意味はありませんでした。彼は柔軟で気安い奴でしたから、その女の子も打ち解けやすかつたんだと思ひます。

ただあるとき、受験勉強も一区切りついたころだつたと思ひますが、彼がいつもどおり家庭教師をしに彼女の部屋にいくと、彼女はいつたん部屋を退出して、何やら家庭教師の彼をしばらく待たせ、ふたたび静かに部屋に戻つてきたそうです。再び戻つてきたとき、なんと彼女は全裸だつたんですつて。震えながら、どうしたらいいかなんてわからないまま、裸で彼の前に突つ立つて、何事かをしようとして、おずおずと両手を彼に差し伸ばしてきましたそうです。

それで、その後いつたいどうしたのと、ついわたしも気になつて聞いてしまいましたがね。彼のほうも、そつち方面が得意なわけでもなし、何を言うかと思つたら、何を言えばいいかなんて皆目わからず、ただ「服を着ろ」と

言つたそうです。それを聞かされたときは、マヌケな感じもしましたが、それ以上に、そりやそうだわなとも思わされましたけれどね。それで、バカなことしちゃいけないというような、まるでどこが聞きかじつたような陳腐な説教を無理やりしたそうです。それを受けて彼女が、ちゃんと考へるし、受験も成功させるから、せめてキスだけしてほしいと言うんだそうです。目に涙をためて。こんなに、誰が見てもふざけてやつてることじやない。まずは何より、無知で無垢な彼女を傷つけないためにはどうすればよいか。

それで、どうでしょう、大学生の家庭教師と、十五歳の中学生女子というのは、本来ヤツちやいけない関係だとは思いますが、当時はそこまで厳禁とかつて、誰も思つていたわけじやなかつた。何がまずいといつて、当時はまだそれが条例違反になつたわけではありませんから、まずいといえば何かしらで彼女が傷ついたり、後悔したりすることでございました。とはいへ、彼女はまるで決死の覚悟でございましょう。無下にするのも彼女が傷つくじやございませんか。それで彼は、まるで先輩ぶつてキスだけして、そのじつ頭をくらくらせながら、なんとかその場を収めたそうです。

その後けつきよく、そのふたりはごくふつうに付き合つたそうですよ。彼女の側が親にも話して、親のほうもすんなり受け入れたらしくてね。おおらかなご両親だつたんでございましょう。それであま、そうなると、やることもやつちやつたでございましょう。でも特に、その後に揉めるわけでもなし、見る限りでは仲睦まじくしていました。その後どうなつたのかなんて、詳しことはわかりませんけれどね。

この当時、大学生の家庭教師が、十五歳の女の子とキスしちやつたということは、そんなにへイトの対象じやなかつたんでござりますな。キモい、なんて思わなかつた。その後、けつきよくやることをやつてしまつたとして、それはもう、周囲としては「はあ、それはまあ、おめでとう」という感じでした。さわやかと、いうほどにさえ、特にインパクトじたいがない薄味の話で、そもそもそうした二人が付き合つているということに関心が向きませんでしたね。当時は、若すぎる女の子とセックスしているということに、思えばうらやましさはありましたが、あまりそういうことに関心が向きませんでした。テレビゲームをいじりだして数秒も経てばすつかり忘れていましたよ。

なんか、他人のそういうことに関心が向く時代じやなかつたんです。色々なことに情熱を向けるのが忙しかつたと、ちょっと昔話を美化して申し上げておきましよう。

現代ではそういうじやないんです。大学生の家庭教師が十五歳の女の子とキスしたとなつたら、「うわ、キツモ」という感情が強烈に湧く。ただならぬヘイト感情が湧く。キモくて無理。嫉妬もあるかもしれないが、その嫉妬も含めてとにかく「キモい」。そういう感触がする。しかもそのあとセックスもしてますからね。キモいんです。とても堪えられたものじやない。ハチさんが混乱しないように、ここでは大学生の彼を、あなたの彼氏に置き換えて考えてみてください。その十五歳とのキスシーンは、ハチさんにとつて何かわけのわからぬほど、キモい、おぞましい、無理、というヘイト感情が湧くもので、同時に果てしない攻撃衝動が湧き上がつてまいりましょう。もう誰の感情だかわからないような感情が、虫酸と共に全身を駆け回るわけです。

こういうのは、個人の感情じやあないんです。集合的無意識なんて言いましてね、これはこの時代の集合的な感情であつて、集合的な気持ちなんですね。それだけに、個人では制御のしようがなく、そこに湧いてくる感情の量も、怒涛のようであつて、まったく果てのないものなんです。といつてね、もちろん、十五歳とキスしちやいましたというの、どこぞの誰とも知らない、ド田舎のヒマな若者ということなら、そんなことにいちいちキモいなんて思いやしません。

なんとも思わない。それは、そこにこころがない場合でござりますな。こころを向けていませんから、またこころが触れてございませんから、「へえ」とか「ふーん」とかで済みます。でもハチさんは、さすがに自分の恋愛、自分との交際ということになると、ハチさん自身の価値観や、意地とかこだわりまで含めて、自身のこころというのが関わつてくるでございましょう。このこころというものが関わつてきたとき、さつき言つた集合的なものがワーッと流れ込んでくるんです。自分のこころじやないものが流れ込んできて、それが何より強烈でたしかな、自分のこころになつてしまふ。

集合的にはいま、男性のセックス機構、それじたいがつまりキモいんです。男性に、男性のセックス機構があるという、そのことじたいがね。

いまこうした単語を聞くだけで、何かもう無理とか、キモいとか、ヘイト感情が湧いてくるでございましょう。

それでハチさんは、そんなキモいものに、尊敬なんて覚えないし、大切な何かだなんて思わない。彼氏だかなんだか知らないが、男性のセックス機構がついていやがる。キモいつたらありしやない。キモいんですからそんなもの、ひたすらヘイトするだけです。

ここで、整理するとこうなります。ハチさんは、男性のセックス機構について、原始的・根源的であつてほしいと望んでいて、そうでないところも乗れないと感じています。ですが、そのハチさんが望んでいる男性のセックス機構が、堪えがたく「キモい」んですよ。この世の終わりというぐらいキモい。だからハチさんは本質的に彼のことを軽蔑するし、ヘイトを覚えて攻撃する。

くれぐれも、それはハチさんの個人的なこころじゃないんです。集合的なこころが、ハチさんの個人的なこころに入り込んで、つまりはハチさんのもとあつたこころを呑み込んでしまい、流れ込んだそれが他ならぬハチさんのこころだということに、書き換わっていくわけです。

だからいま、芸能界のスキャンダルなども、ヘイト感情が爆発するのはそつち方面になつてているでございましょう。いちいちのことは取沙汰いたしませんが。あいうのもつまりは、男性のセックス機構そのものがキモい、ということに尽きてござります。スキャンダルにかかわってはいろんな情報が飛び交いますが、もう事実がどうかなんて人々にとつてどうでもいい。そういうのが、見ていてわかる、あるいは見ていてわかるでございましょう。男性のセックス機構そのものがただキモい。ひたすらキモい。無理。ヘイト感情が圧倒的に無理。見るだけで吐きそう、想像するだけで吐きそう。いま芸能人が十五歳の女の子と個人的にキスしたということがバレたらもう再起不能でございましょう。仮に女の子の側が求めたことであつたとしてもそれはもうキモいんです。男性に男性のセックス機構があるということじたいがキモい。そのことを回避するには、もう一切のこころを接触させないというぐらいしか回避方法がありません。

ちょっと余談ですが、世の中の少なからぬ夫婦というのは、じつさいふた

りとも一切こころを触れ合わせず、だから夫婦としてセックスができるとうことを、けつこうやつてしているものでございます。もちろんそんなことはTVショーや大っぴらに言わることではありませんが、それだつてけつこう掘り出してみれば現代では標準的なもののひとつと言えてしまうのでございます。

もしハチさんの彼氏さんが、いま駅のホームで煙草を吸つて、その吸殻を線路に捨てたら、それだけで「無理」つてなるでしよう。少なくともハチさんの友人から見れば彼は「無理」になる。線路に吸殻を捨てたとして、そのことがどんな重罪になるのかというと、きっと重罪にはならないんでございましょう。けれども、司法がどうこうじゃない、集団的なこころとして「無理」になる。キモさが湧いて、根っこから湧いてくるヘイト感情が止まらなくなる。それはハチさん個人の感情ではないんです。

それと同じです。ハチさんが男性のセックス機構を要求しながら、それと恋愛しようとこころを向けることが、ハチさんの内部に、ハチさん個人のものではないキモさとヘイト感情を湧き出させるんです。

さあこうしてじつくり考えますと、ハチさんにとって彼氏さんは、「恋愛対象だからヘイト対象」ということで、思いがけず説明がつくもんでございましょう。それがハチさんの恋愛というよりは、それが現代の恋愛なんでござります。だからもし、ハチさんの苛立ちと不快感を解決するというのであれば、それについてハチさんがどうこうするというのではなく、世の中全体が変化するしかありません。世の中全体がどうなればいいか。つまり、世の中全体、その集合的なものが、男性のセックス機構を愛するようになるしかないわけでござります。これは、言うは易しといふことにさえ値しない、理論上はただそななるねということにすぎないわけですが、もちろんご存じのように、いま世の中全体にそんな方向へ進もうという気配や予兆はいつさございません。むしろ、そうではない方向へ進んでいく気配と予兆がばっかりにひしめいているわけですから、これからハチさんが彼氏さんに覚えているヘイトと攻撃衝動は、これまでよりずっと強くなつていくということを既定路線にして考えておかねばなりません。

なぜこんなことになつたのか、経緯はまったくわからないのですが、ひょ

つとしたらまるで、世の中の集合的なところじたいに工作を仕掛けている悪い連中でもいるのじゃないかと思わされさえするわけです。国家レベルで、諜報部員が破壊工作を仕掛けているんじゃないかとさえ疑いたくなる。集合的諜報工作、みたいな。もちろんそんなことは、いわゆる都市伝説にしかなりませんで、こんなところで座興にさえなりませんが。

ところで、おや、ハチさん聞こえますか。ハチさんから応答がございません。あーあー、接続状態が悪くなりましたでございましょうか。ハチさん、はちみつなすびさん。聞こえますか、聞こえていたら応答してください。はちみつなすびさん。

はちみつなすびさん、お尋ねしたいことがあります。できたら答えてください。

はちみつなすびさんは、彼氏さんを信頼していますか。

また、彼氏さんは、はちみつなすびさんを信頼していますか。

もしもーし。

ちょっと接続が切れてしまつたようでございます。残念ではございますが、時間ですのできょうはこのへんで。

書物

うこと

書物というのは、きっと映画でもいいし、楽譜でもいいと思うのだ。どれもこれも、ざっくり言えば「書かれたもの」だからな。

舞台演劇でもいいし、絵画でもかまわないし、踊りだって、本物なら何か

を著わすことにはなっているのだろう。

禅僧なら、坐禅という形じたいがその人自身の著わしたものということがあるだろうし、念仏を唱える人なら、その念仏が自分の著わしたものということになるだろう。

書物といふことは、書き手の著者としての「書物」にはならない。

料理人だって、あるいは大工さんだつて……

では、運動が好きな人は、死ぬまでずーっと走つていればいいのだろうか。

そのへんがおれにはよくわからない。

おれ自身が、あまりそういう運動をしないので、経験的にわからないのだ。

走るのが好きな人は、競技場のトラックを、ずーっと走つて回り続けてい

ればいいのだろうか。

それでいいという人もたしかにいるのかもしれない。

でもなにか、それはものすごく特殊な、数少ないタイプなんじやないかと思える。

まあいいや。

とりあえず、ここではなるべく「書物」に寄せよう。

「お前の書物はどれか」

根っからのクリスチヤンなら、聖書を示し、これがわたしの書物ですと言えばいいだろうし、仏道を往く人なら、経文を示し、これがわたしの書物ですと言えばいいだろう。

ただ、それが自分の書物だというからには、そこに何が書かれているかを、

ちゃんと自分が言えなくてはだめだ。

ただ、それが自分の書物だというからには、あるだろ。わたしの書物です、なんて

言っているんだからな。

かといって、書かれてあることのすべてを把握する必要はない。

そんなむづかしいことできつこないからあきらめていい。

どこか一部分でもいいのだ。

こんなエッセイを書いたところで、何かが進展するわけではない。世の中がどう進展するかについて、影響を与えるわけではないし、じゃあわたし自身の魂を進展させるのかというと、そういうわけでもない、と思う。それは、ネガティブに捉えているのではなくて、そもそも、進展という捉え方が、肝腎なことに当てはまらないよう思うのだ。

じゃあ肝腎なことって何だろうな。当たり前だが、こうしておれが自分なりにエッセイを書くと、ここにはおれの書物が残るのだ。ものすごく当たり前だ。

書物。

それは無為なものだろうか。

書物はそもそも、世の中を進展させるために著わされるものだろうか。

ここに著わしたエッセイとか、小説とかは、おれが書いたものなので、どう見てもおれの書物だ。

「お前の書物はどれか」

と訊かれることがあつたら、これがそのひとつです、と言つて提出することができる。

誰に提出するとかいうものでもないよ。

書物が、それじたい無為のものか、それとも、じつはそうではないのか、という問ひだ。

めずらしく文学者らしくなってきたではないか。

わたしの書物はこのとおりだが、あなたの書物はどれだろうか。

あなたの書物というのは、必ずしも、あなたが書いたものでなくてよい。

たとえば、根からのクリスチヤンなら、聖書がわたしの書物です、とい

指を差して、たしかに、「ここに書かれているのが、わたしの書物です」というのがあればそれでいい。

そうして「わたしの書物です」と語られるとき、もちろんその声とことばは、「その人そのもの」と聞こえるものでなくてはならない。

これでは言っていることがわかりづらいか。いや、なんとなくわかつてもらえるだろう。たとえばあなたが、思いつきと衝動で、何かしらのライトノベルを書いてみたとする。

何か、作中に向けての空想や、小説っぽい文体のイメージを膨らませる。そしてライトノベルを執筆したとき、そこに著わされてくるものは、あなたの書物であるはずが、じつさいには残念ながら、「わたしの書物」というふうにはならないだろう。

そこに書かれているのは、何かしら膨らまされたイメージでしかなく、しかもたいていは「誰にでもありがちなイメージ」だ。それをもつて「わたしの書物」ということには、残念ながらならない。

だからといって悪いとは思わないけれどね。

なにも入口から成功しようなんてあさましいことを考えなくていいじゃないか、ガンガン失敗しようぜ。

一方、わたしが今回ここに書いたエッセイや小説は、構成も着想もぐちゃぐちゃなのだが、じつに「わたしのもの」はある。

何度も述べたように、わたしは本心からしか話さないから。

本心からしか話さず、本心からしか書かない、だからあなたもよく知るところ、ここにあるのはじつに「わたしのもの」、あなたから見れば「この人のもの」なのだ。

そうでなきやこんなデタラメなエッセイなんて読んでいられないわな。

それで、内容がまあ、決して褒められたものではなかつたとしても、ここにあるのは完全に「わたしの書物」となる。

仮にあなたが、とても頭の良い人だつたとしよう。理解力も記憶力もすぐれている。

さらにはあなたは、本の虫というやつで、大量に本を読み、そのひとつひとつの中をしっかりと覚えていたとする。

それで、一般に高度とされる書物のことごとくについて、あなたがものすごく詳しくなったとしても、それについて詳しいというだけでは、それは「あなたの書物」にはならない。

仮にあなたが、森鷗外の全集・全文を丸暗記していたとしても、それは頭の中に青空文庫のデータがあるというだけにすぎず、それをもつて森鷗外があなたの書物ということにはならない。

あなたの書物はどれだろうか。

あなたは、わたしが書いたものを読むことで、わたしのことを理解することができる。

理解というより、正確には、わたしに出会うことができ、わたしを知ることができる。

さらにはあなたは、大江健三郎を読み（といつても笑いながら読めよ）、フロイトの全集を読み、河合隼雄を百冊読み、ムツゴロウさんの全集を読み、銀河英雄伝説を読み、イースI・IIをクリアし、アサシンクリードをほぼ全シリーズクリアし、ぶよぶよで十四連鎖ぐらいは組めるようになって、ジューダスピリーストとスキッドロウとインペリテリをひとつおり聴き、桑田佳祐も一通り聴き、遡つてボブディランもあるていど聴き、まつたく興味の湧かない男声合唱曲も聴き、宮崎駿作品の前期作品は入念に観て、映画「タイタニック」も観て、エイドリアンライン監督の映画はすべて観てその中に描かれている秘密をすべて読み取り、幕末の大久保一蔵の仕事を考えて青ざめるというていどには歴史に通じ、数学の二次曲線や物理化学の単位ぐらいは読み取れるようになって、あとはわたしがどこぞで教えている身体操作と武術みたいなものをひとつおり学んだら、あなたはおれのことを知ることができる。

なんだか列挙していると恥ずかしいが、おれのすべてなんてだいたいそんなもので出来ているのだ。

たいしたものではないのだ。わつはつは。とはいえ、それですがおれのすべてというのは言い過ぎか。あくまで、

おれの「書物的な側面」のすべて、ということになる。

書物的な面ではない、直接歩いた場所や、直接過ごした時間などは、さすがに省かれてしまう。

ただ、その「書物的な側面」というのが、じつは思いがけずデカいのかも知れないとも思うのだ。

書物的な側面なしに、直接歩いた場所とか、直接過ごした時間とかだけが、独立してありうるものだらうか？

どうもそんな気はしないんだよな。

あなたは、おれの書物を読むことで、おれを知ることができる。

では逆に、おれは何を読めば、あなたを知ることができるだらう。

「あなたの書物」はどれだ。

もし、どの書物を読んだとしても、あなたのことを探ることは得ないのだとすると、あなたには未だ、書物的な側面がないということになる。

どうなんだろうな、それでいいのだらうか。

人の「書物的な側面」なんて話、ヨソではほとんど聞いたことがないので、それが必要なことなのかどうか、あまりにも根拠がない。

ただなんとなく、おれの直覚が、何かをこそそ伝えてくるのだ。

その「書物的な側面」というやつが、思いがけずデカいですよ、存外デカい、いやあけつこう支配的だ、というようなことを伝えてくる。

うーん、完全に、ただの気のせいかもしれないけれど。

「わたしの書物」というのがなかつたら、何がどうなるというのだらうか。

「わたしの書物」がなかつた場合、
「じゃあ、該当なし、ということですね！」

ということになるのかというと、そうはならない。

書物というのは、この世界で書かれたすべてのものを含むのだ。

ツイッター（X）や、ウェブ掲示板等で書かれたコメントなども、すべて「書物」に含まれる。

思ひがけないことにあなたは、ツイッター（X）に書かれている、膨大な

悪口雑言、罵詈謔謔、厭味や愚痴といったものについて、

「あのさあ、これってあなたの書物じゃないの？」

と訊かれるのだ。

あなたのアカウントでもなければ、あなたの書き込みでもないものについてだよ。

もちろんあなたは、エエツとびっくりし、「それはわたしの書物ではありません」と断固として言うだらう。

ところがだ。

あなたはたとえば、聖書に書かれていることと、経典に書かれていること、ツイッター（X）でつぶやかれていること、この三つについて、

「どれにいちばん通じているか」と訊かれるのだ。

訊かれるというか、それを調べられる。

そのときどうせんながら、きゅうに言われても、聖書に何が書かれているのかなんてわからないし、それをうまく言うなんてことはできない。経典に何が書かれているかなんて、さらにわからない。うまく言うなんてできるわけがない。

それでじゃあ、ツイッター（X）に書かれていることはどうなのかというと、あなたはそれについてはスッと理解できて、そこに何が書かれているのかがわかつてしまうのだ。何が書かれているかについて、あなたはうまく言うということまでできてしまう。

それで、

「じゃあ、これがあなたの書物ですね。はい、登録完了いたしました。ではこちらでの手続きは以上となります。次のレーンにお進みください」ということになつてしまふ。

そしてあなたは、その書物にふさわしい何かとして扱われ、何かになつてしまふのだった。

説明になつていないが、もちろん説明する気がないし、こんなこと説明する権限なんか誰にもない。

自分がいちばん通じているものが、自分の書物ということにされてしまう。
おれの場合、その点では安心だ。

ツイッター（X）に書かれていることについて訊かれても、

「そこに書かれているものは、目立ったものは悪口雑言と罵詈謔誑、あるいは厭味や愚痴です。一部にはネタやジョークというのもありますけれど。何にせよ、それらはわたしの書物ではありません。なぜなら、わたしにはわたし自身が著したあきらかな書物があり、それこそがわたしの書物だからです。またそれ以外にも、優れた人によって書かれたわたしの書物と呼ぶべきものが多い、わたしはそちらに通じているのです。それに比べると、わたしはツイッター（X）などにはまったく通じておらず、そちらはわたしの書物ではないのです」

と、堂々と言えるわけだ。

あなたの語る声、その波長はどの書物にいちばん近しいか。

あなたの語る声、その響きはどの書物に一番通じているか。

そうしたことから「あなたの書物」が決定される。

仮に、そうして決定された「あなたの書物」が、あきらかに焼き捨てられ

たほうがよいものとして火の中にボイーと投げ込まれるのだ。

その場合、あなたの自身もその書物と一緒に焼き捨てられてしまう。

要らないものとして火の中にボイーと投げ込まれるのだ。

それではあまりに無念すぎるよなあ。

ちなみに今このとき、われわれ日本人にとつての最大手、最もポピュラー

な「わたしの書物」とは何か。

それはもう、言わずもがな「文春」だ。

甘ったれてはいけない、それがわれわれの事実じやねえか。あなたの書物

は「文春」ですね」ということで、次のレーンに送り込まれてしまう。

なかなか慈悲だが、しようがない。

われわれ自身はなぜか、文春その他の週刊誌を、焼き捨てないのだから

ようがない。

われわれはいま、文春その他の週刊誌を、正の書物として、その権威を奉

つっているのだ。

文春という書物に従い、われわれは著名な人を処断している。

それが事実だからしようがないよなあ。

何が「あなたの書物」になるのか。

このことはちょっと説明がむつかしいのだ。

たとえばあなたが、マンガ「ワンピース」の熱烈なファンだったとする。

そのアニメキャラクターの声も、ずいぶんな伎倆で模倣できただとする。

さらにはいろんなイベントで、そのアニメキャラクターのコスプレをして

歩きまわった。

だからといって、マンガ「ワンピース」が、あなたの書物ということには

たぶんならないのだ。

あなたはただマンガ「ワンピース」のファンなのであって、ルフイの魂が

あなたの魂を形成したというわけではない。

あなたはコスプレの衣装を持ってコミケに行くのであって、イカダを持つ

て海に行くのではない。

だからあなたの声は、「ワンピース好き集まれ～☆407」というスレッドに

通じている。

それは、「ワンピースに自信ニキ」の声であり、あるいはコスプレアカウン

トと「いいね！」の声だ。

別にそれが悪いというわけではない。

ただ、ワンピースが「わたしの書物」ということにはならないと思われる。

そもそも書物とは何であるのか。

書物とは、「世界とはこのようである」という真相を記述したロゴスのこ

とだ。

たとえば、太宰治がわたしの書物ですという人は、どうせんながら、「人間

失格」を抱えて、「世界とはこのようなのです、これが真相なのです」と言つ

ているに等しいということになる。

「世界とはこのようである」ということ。

それを記述してあるロゴスとして、いちばんプレーンなのはきっと新聞のニュース記事だろう。

〇〇社と××社が経営統合に向けて合意、というような記事があると、た

しかに世界とはこのようであるということを著わしている。

とはいえるだけだと世界をただ「世の中」に限定していることになる

ので、あきらかに不十分だ。新聞記事だけでそれを佳き「わたしの書物」とすることはできないだろう。

逆に、「世界とはこのようである」ということについて、いちばんオリジナリどおりに書かれているのは神話だということになる。

日本の場合「イザナギとイザナミが」で、聖書の場合は「光あれ」。

まさに、世界とはこのようであるということの、いちばんの元々とされるもの。

あなたの書物はどれだろうか。

おれの書物は、きょうはこれだ。

今回、いちおう「信頼」ということをキーワードに書き進めてきた。

わたしが現代で見かける、あちこちの、威勢の良い人たちは、互いに信頼しあっているのだろうか。

わからない。ただ、勝手に決めつけるべきではないと、どうぜんながら思つていてる。

それでもわたしの目には、まるで彼らが信頼しあっていないというように見える。

仲は良さそうなのだが、信頼関係があるというふうに見えない。

信頼、なんて偉そうに言って、わたし自身はどうなのか。

われこそがア、その輝かしき信頼というものに、アア至りし者にて候、かしこみかしこみ申すウと、威張り尽くせるような根拠や実績を、おれはまったく持ち合わせていない。

ただいちおう、おれのできるかぎりのこととして、おれは本心から書き、本心から話すようしている。

それはきっと、ホンネをぶちまける、というような安易なこととは異なるはずだ。

こんなことをしていても、世の中の進展にはまったく寄与しない。

世の中のみならず、べつにおれの魂だって進展しないだろう。

だがわたしはそもそも進展なんてことを求めているのではないらしい。

これでもいちおう戦つてているのだ。

これしか戦い方がないというように感じている。

もし、わたしが信頼なんてものを得られるとしたら、そのことはきっと、次の一点にのみ懸かっているだろう。

いわく、「わたしの書物」が、まったくわたしそのものであること。

そう考えてみればけつこう単純なことなのかもしれない。

わたしの書物と、わたしそのものが、なんともいえず同一だということ。

そりやあな、「わたしの書物」なんて言うからには、なるべくそれはわたしのものと同一でなくてはならない。

書物はまた、本質として、「世界とはこのようである」という真相のロゴスでもあつた。

だから、「世界とはこのようである」というロゴスが、わたしそのものと同一でなくてはならない、ということになる。

そのときようやく、信頼というものが得られる。

それだつてただの同一性だけね。

同一性といつて、つまり、わたしと、書物と、世界が同一といふことか。

うーむ、これはちょっと不気味なことになつてくるなあ。

先ほど、人には書物的側面があるというような言い方をしたけれど、これ

じやあまるで、三つの要素がすべてそうした側面を成しているというよう

聞こえてくる。

書物的側面と、わたし的側面と、世界的側面、それらが同一だ、と言つて

いるということになる。

うへつ、なんか気持ち悪い。

ヨーガ的な考え方で、わたし（アートマン）と世界（ブラフマン）がある

のはわかるけれど、そこに書物的側面なんてのが入つてくるというのは聞いたことがないぞ。

まあいや、今回、「信頼」が主題の話だし。

なんかヤバい話になつたからそつちはとりあえず置いておこう。

わたしが知っているのは、書物について、これを著わすというまるで無為なことが、わたしにとつてはまったくさびしくないということだ。

作業としては完全に孤独な作業なのね。

わたしは、本心から書くし、本心から話す。

本心からしか書かないし、本心からしか話さない。

それが、「わたしの書物」と「わたしのもの」に同一性をもたらすのだろう。

わたしが、何の進展にもならないくせに、まるで無為なようなこの書き話しさえんえんとやっているのはなぜなのか。

これはいったい何の営為なのか。

さしあたり名づけるなら、これはどうも、何かしら「同一性の営為」ということのようだ。

わたしの書物。

わたしのもの。

世界はこのようである。

うへつ、やつぱり気持ちわりい。

同一性ということについて、そして信頼ということについて。

ごまかしながら書いてきたけれど、やつぱり、お互いに信頼があるほうが多いよなあ。

いま、信頼関係がないグループというほうが、芸風としてはウケていると

いうか、ヒットしているのだと思うけれど。

商売としてそちらを進めるのは、そういう業者としてはしようがないとして、それでも誰だって本心からそれをよろこんでいるわけじゃないと思う。

あなたはもともと、信頼に足る存在なのだ。

ただ、同一性が損なわれているだけなんだな。

なぜ同一性が損なわれるか。

それはきっと、「わたし」と「ホンネ」に同一性を求めたからだ。

一般的には、「わたし」と「ホンネ」は、ほとんどイコールのように思われているのだろうけれど。

おれの知る限り、それは単純な誤りだ。

「わたし」と「ホンネ」に同一性はない。

「ホンネ」というのは集合的にいくらでも変わってしまう。

先月と今月でホンネは違うし、きょうと明日でもうホンネは変わってしま

う。

同一性を求めるなら、もういつも、「本音」はあきらめて、「本」にしてしまいたいさい。

本でも書物でも話は同じだ。

うーん、やつぱり書物って、なんか思ったよりヤバい何かなんじやないか。本がわたしになり、わたしが本になる。

うへつ、だから気持ち悪いっての。

わたしはいま、ますますヤバいものが見えかかっているのだが、さすがにもうそんなことを書いていられないでの、今回の話はこれでおしまい。

わたしは書物を著わしたのであった。

もともとそれがやりたいといって始めたんだしな。

本を手に取ると、あるいは物を手に取ると……

うへええ、気持ち悪いのでもうこの話は終わり。

本を手に取って、物を手に取って、あなたと同一性を与えなさい。手に取る思いがけないもの、何でもないものが、それじたい「あなた」なのだ。

そのことを迷わせているのがあなたの「ホンネ」だ。

現代の、ホンネ・アカウントのつぶやきにだまされではないよ。

10年代から、ここまで十五年間は、ひよつとして、ホンネの時代、たつたのだろうか?

まあいや。あなたは同一性にかかわり、ホンネにだまされではないよ。

同一性ってたぶん、めっちゃ思いがけない、とんでもない形で存在しているから。

じつさい、あなたはこのわけのわからない話を聞きながら、なぜかこのとき、すっかりさびしくはないでしよう。

わけがわからんよね。

さびしくなつたらまた読みにいらつしやい。

それでは、また。

〔彼らは信頼しあつてゐるのだろうか? 〔〕〕